

イングリッシュ・セツルメントの祖

——キャノン・バーネットの研究——

山 口 信 治

は じ め に

英国における1880年代、さらにその後続く20世紀の前半におけるこの時期は「著しい貧富の差」が生じ、また「理想と現実とが同じようにくい違い」のでてくる時期である。したがってまたこのくい違いや差を少しでもなくし、またせばめようとする歴史的運動の期とみるのも歴史学の一つの方法ではなかろうか。むしろ筆者はそうしたくい違いの差に迫ろうとした社会改良者のひとりキャノン・サムエル・バーネット (1844~1913) とそのアイデアリズム (Practicable Socialism) の実践の場となったユニバーシティ・セツルメント即ちトインビー・ホール (Toynbee Hall), 特に今回は前者のトインビー・ホール生みの親であるキャノン・サムエル・バーネットについて若干まとめておこうと思う。

いくつかの限定：

限定の1：19世紀後半の英国の社会事業

限定の2：社会事業 (social work) の方法に関する研究

限定の3：イングリッシュ・セツルメント (English Settlement) の研究

限定の4：イングリッシュ・セツルメントの生みの親 サムエル・バーネット (Samuel Barnett 1844-1913) と彼のアイディア Practicable Socialism の研究

Ref. 限定1：11 A. F. Youngs & E. T. Ashton, *British Social Work in the Nineteenth Century* (Kegan Paul) 1956.

12 K. Woodroffe, *From Charity to Social Work*, 1956.

13 吉田久一, 高島進, 社会事業の歴史, 第6 近代社会事業の萌芽, 誠信書房, 昭39.

14 S. クイーン, 西洋社会事業史, シネルウア書房, 昭36.

Ref. 限定2：

Ref. 13. (吉田, 高島) Ibid 104~

「とりわけ C. O. S とセツルメントの運動が注目される……」

21 W. A. Friedlander (by Edited). *Concepts & Methods of Social Work*, 1958.

(11) Young & Ashton, Ibid. 92-114, Part I. 6. C. O. S.

〃 Ibid. 235-58, Part II. 12. Settlements

22 Basanquet, *Social Work in London, 1869 to 1912.*

A History of the C. O. S. 1914.

- 23 Readings in the Development of Social Settlement, 1950.
 24 S. Queen, Social Work in the Light of History, 1922.
 (11) Young & Ashton.
 Part II. Main Branches of Social Work.
 4.5.6 *Family case work*.
 12.13 *Group Work*.
 26 W. Picht, Toynbee Hall and the English Settlement Movement (G. Bell and Sons, 1914)
 Part III. The Settlement Movement in Great Britain.
 27 J. Leiby, A. History of Social Welfare and Social Work in the United States
 Columbia Univ, Press. 1978. ch : 8. c.o.s & social Settlements, 1877-1920, pp.
 111~135.

Ref. 限定3 : Settlements.-Toynbee Hall.

- 26 W. Picht. Ibid 1~98.
 Part I. The Origin of the Settlement Movement and the Foundation of
 Toynbee Hall.
 27 J. Leiby Ibid. 111~ C.O.S & settlements.
 Part II. Toynbee Hall—"Mother of Settlements"
 11 Young & Ashton. Ibid. chap. 12 Settlement.
 31 Settlements : History. (1175)(Encyclopedia of Social Work) NASW. Toynbee
 Hall. Ibid 1170.
 32 Jose Herris, William Beveridge, Chap. 3. Toynbee Hall. pp. 44-63.
 33
 35 大林宗嗣 セツルメント研究 太15. 同入社
 14 S. クイーン Ibid. 第8章
 36 社会事業研究 第16巻4号 特集：セツルメント研究
 37 社会事業 Vol. 14巻3号 セツルメント号 6月号 昭5/6.
 38 西内潔 セツルメントの発展過程とその分析 社会事業 Vol. p. 131~

Ref. 限定4 : Settlements 生みの親 Samuel Barnett. (のちにキャノン・バーネット) となる

(邦文におけるキャノン・バーネットに関する記録は以下に示した通りできわめて少くない)

- 41 三好豊太郎, 社会事業精義 三省堂 昭14,
 第5章, 教化事業, 第5節3目, トインビー・ホールの成立, p. 581.
 35 大林宗嗣, Ibid. 111-2, 113, 115.
 ・スラムの状況をオクスホード・ケレブリッチに訴えることを怠らなかった。
 ・バーネットが A. トインビーに出会う機会をえた……。
 14 S. クイーン, Ibid p. 114.
 「1875. A. トインビーはホワイトチャペルのバーネット師の教区と連絡をとり……」
 13 吉田, 高島, Ibid p. 112-3.
 「トインビーホールがバーネット夫妻の指導でオックスオード・ケレブリッチ両大学
 の関係者によって生まれる……と」
 42 高島進, バーネットの大学セツルメント思想, その社会改良主義的性格, 研究論文集
 日本福祉大学, 1963. 但し, バーネットの名 (Burnett) とあるがこれは Barnett の
 あやまり。

参考

26 Picht, Ibid 23-29.

11 Young & Ashton, Ibid. 223-4.

以上、4つの限定から English Settlements : Toynbee Hall, - “the Mother of Settlements” (Picht, Ibid) Center of Social Work (W. Picht, Toynbee Hall, p 33.) とその生みの親 (father of idea) Samuel Barnett についてアプローチする訳けだが。先きの Ref. 4 で若干メモしておいたが、彼に関する記録が必ずしも A. Toynbee に比べて多いというものではない。そして Ref. 4 で示した如く p. 42 高島進「バーネットの大学セツルメント思想」以外には見るべきものがなく、一行もしくは多くて数行内にとどめられているのが普通でそれ以上のことは邦文を以てしては十分な内容を知ることができないのが実情といって良い。

そこでわれわれは、つとめて文献を外国のものに頼ることになるが、その主要なものは何といっても彼の妻君 (Beatrice Barnett) らの手で編集された。『Samuel Barnett : His Life, Work and Friends』(London, 1921) である。さらにもう一つ、Emily K. Abel の『Canon Barnett and the First Thirty Years of Toynbee Hall.』(Queen Mary College, University of London)

(一) ユニバーシティ・セツルメント生みの親ことキャノン・サムエル・バーネット (Canon Samuel Barnett (1844~1913)) についておもうこと

彼こそ、19世紀後半つまり英国ヴィクトリア後期における社会改良者に名を連らねる偉大なる人物の一人である。今日、大英帝国に寄与した聖人たちのねむるウエストミンスター寺院 (Westminster Abbey) には、シドニー・ウェップ夫婦 (Sidney Beatrice Webb) や、クレメント・アトリー (Clement Attlee) 等とともに 静かに夫人とともにやす (安息) んでいる。(前者二人は同寺院入口正面の床にウィンストン・チャーチルの記念碑が見られる。その左側の伽藍を支える大きな高い柱の根元近くに30×30センチほどの黒い大理石に彼らの名を発見することができる。さらにキャノン・サムエル・バーネットのそれはさらに正面のサンクチュアリ (寺院のほぼ中央にある) に向って右側の入口の壁の上に70センチ×90センチ程もあるうか白い大理石がはめ込まれている) この記念碑にはバーネットの人柄とその偉業を偲ぶ碑文 “fear not to see the carse of the birds” 「たとえ鳥が種をついばむとも種まくことを恐れてはならない」が刻まれている。ただ筆者の率直な印象は、それとは (碑文) 異った評価をあえてしたい気持ちになる。ただ残念ながら今その適切な表現が見つからないので、ここではさし控えるがいつか機会があればそれについてまた述べてみたい。ただ彼の業績をうき彫りにする便宜上こんな手法はどうであろうか、即ち最もきびしく評価した同僚、(あるいは同業者と言った方が適切かと思うが) ウェストミンスターに眠るビートライス・ウェップつまりウェップ夫人だが、ここで少しく彼女の酷評に耳を傾けてみたい。曰く、「その頭脳たるやごく平凡で、そうたいした切れ者というものでもない、その上教会での説教たるや、率直に言って実に貧弱で何ら味気のある、味わいぶかいものではなかった。」と、しかもその理由だが「切れ者でないから (筆者) の一言につきる。まず彼の神学理論の理解に、あるいはまた知的理解にあったといって良いのであろう。しかもその上、理解の仕方だが、実にウイーク (軟弱) だ。したがってまたこれ

は、しばしば実践の面 (Practicable Socialism) においてあらわれるなど望みのないほどの (絶望に近いほどの) 混乱ぶりを呈していると言って良い、あげくの果、自らその行きづまりになやんだりもしている。事実そのまよいをかくし得なかったのもそのためだ¹⁾²⁾ 言々と彼の知性からはじまりいろいろとそれについてふれている。またその人柄についても、「ほかの一つおぼえのように生涯その信念にがんきょうに固執し続け」さらに、「即ち人の品性 (格) (character) なるものが人間の困窮 (predicament 筆者の解釈) 即ちさまざまな困難・苦痛・不幸・なやみを導き出すもの、また同時にこれらを改良・改善するための、つまり社会改良のための鍵 (the key to)³⁾ となるとくりかえすだけだった。」 などなど、以上、要約するまでもなく彼の品性論はこの二面性を説いたもので、むしろ品性の “(the clun to social distress)” を改善、もしくは改良することによってそれから人々を解放しようとしたところに彼の言う改良哲学を学的に表明したものと言える。だが彼を酷評した B・ウェップ夫人にはそうした受け止め方ができず「彼は反面、それだけまじめ人間と言えるのかも知れない…、そのはず信心深いことかつまたもの事に熱中するところは天下一品で他の誰れにもマネのできない人間だったように思う。それでいて自己克己と言おうか出来るわけ、人目につかぬよう、つまり自己を目立たさない (self-effacing: 何ものかをさえた) 性格の持ち主と言うことができよう。では何をおさえていたのかと言えばそれは自分の ‘decaptively mildmannered little man ---’ ということであったであろう。」…と。またこうも言う、即ちその執念について述べたものだが「彼が確信いやそれにとらわれていたと言った方が適切なのだが、真の社会進歩というのが自己の罪意識 (sense of sin), これなくしては到達し得ない…」と。この主張はより科学的思考を社会改良の唯一絶体なる信念としたフェビアン協会 “Fabian Society” (1884設立)⁴⁾ の理論的指導に当たった彼女にとっては、余りにも非科学でしかも時代おくれとしか映らなかったのも無理からぬこととおもう。

両雄ともに今は論争をさけ静かにウエストミンスター寺院に眠る者であるからして、英国の歴史に大いなる貢献した人物であることは容易に想像がつく、少なくとも両雄が生きて活躍していた当時は、同じ社会改良の途を拓いたもののキャノン・バーネットは、「イングリッシュ・セツルメント」“English Settlement” (Toynbee Hall 1884 設立)⁵⁾ をおこし、今日まで尚その威光は消すことなく福祉国家を支える一本の柱として輝きつづけているのに対して、B・ウェップ夫人の「フェビアン協会」の組合 (Co-operation theory) 理論もまた見事に今日英国・与党 (労働党内閣) の基本とまで目される程のものとなってこれまた実を結んでいると言って良い。したがってまた双方ともに生きのこり “survive” (とくに英国人の好んでつかうことばの一つ) という英国の論理 (生きのこりの価値規範) からして真理だとするならば、むしろ我々は互いに拮抗しあう棒の両極 (bi-polor) と考えることができる。またそうした両極に分かつような壮烈な意見の対立があったればこそ、ともに生き残り得たのであろうし我々は批判のまえにけんきょうに人間の人間に対する制度、つまり「歴史的事実」としてこれをありのまま受

けとめてみるものが寛容であろうかと思った次第である。

ただ私見を述べるならば、筆者は前者の「イングリッシュ・セツルメント」つまり非科学的あまりに人間的なるものを媒介とした自己の覚醒を求めるところに社会改良即ち不幸な人間の状態から解放される鍵を発見したのに対して、他（後者）の「フェビアン協会」のそれは協同組合方式と言おうか社会的連合つまり社会の自覚に求めたところに、両者のそもそもの違いがあらわれたので、ともに英国の福祉国家を担ってきた二つの柱と見たいし、また研究の余地があらうかと思う。してみるならばいずれの方法にせよ山の頂きに、つまり人間社会の幸福（福祉：well-being）に至りうるそれぞれのルートだとすれば、あえて筆者は前者のより人間的なもの、今日流にことばをかえれば、まさしく基本を「マン・パワー・システム（man power system）」に迫った「イングリッシュ・セツルメント」の生みの親キャノン・サムエル・バーネットに異常な程の興味と関心をもつ者だということも判ってもらえるかとも思う。

何故ならば、ただに人間つまり筆者のもつ個人的感情に左右されるのではなく、今日でも尚かつその精神としているセツルメントが存続しているからで、それ自体先きに述べた「生き残り」の原理がそこにはあるものと思ったからだ。その上、このあまりに人間的なものが人間社会福祉の場合最大公約数と思えるようになったからだ。ことばを換えれば最後は結局「金ではなくひとなのだ “not only money, but also friendship”」と言われる如く、人から人 “people needs people”⁶⁾⁷⁾⁸⁾ への福祉の行為体系と解して良いし、何程かそれが社会により拘束されるようなことがあったとしても、それを越えて人と関わろうとする本源的な問いのある存在物であることを打ち消すことが出来ないからである。

私流にこの問いを解釈するならば今日余りにも社会福祉の過度の科学的態度（これを否定する者ではないが）これを追求するあまり、「人間」が科学化され分析され公式化され、やがてついに原子化され、すべて原因と結果とのプロセスとしての人間が解明されているのにもかかわらず、一向に苦悩する人間 “pridecament”, “Homo patience” からその問題のしこりを取り除くことができないという臨床（場）でのにがい経験を余りにも多く持つからであろうか。しかも単に問題をもつクライアントを見るだけではなく、彼らの苦悩にしばしまき込まれ（counterference）るとともに苦しむことがあるからだろうか。もっともそうしたクライアントの問題にまき込まれるのはワーカーの訓練不足、未熟だと言うのであれば別だが、得てして同業者たちの中にそうした問題をかかえて苦しんでいる者が少なくないからだ。もし苦悩するクライアントの問題の前に立ち得たとしてもワーカー自らが何も援助してやることの出来ない者とかんじ、そのワーカーであってワーカーでないこの矛盾に悩まされることがある。然ばなにも出来ないのかと問われれば、これまた不思議なことで否と言わざるを得ない。つまりなにも出来ない、がその苦痛に身をちぢめているクライアントの前に立ったとき、今さらのように自分の無力を知り、クライアントと彼のもつ問題…（上のことを自覚して立つという道德めいた表現になるが、謙虚さといおうか）そんな態度の必要さを切に感ずるからだろう。したがっ

でまた、この感は一層ここに（英国のセツルメント館への昭和52年から1カ年の研修）来て強くしたからだ。で、この態度こそはプロヘッショナルな社会的自覚のまゝに人間としての限り、つまり限界をわきまえ、この限界を越える人間以上の何ものか、これに帰依する心境が、苦悩するクライアントそして何らかの意味で問題解決の相互に作用し合う共同の心理学的場（Raport）ができることになる。したがってまた、この「場」の欠如は、単にワーカーの前に問題を持ち、その問題にがんじがらめになって身動のとれない客体としての人間を…見るのではなく、よしんばともに溺れることがあったとしても、それはワーカーのスキルの問題ではない。むしろ己を反省してみるときに「彼」と「私」との間にある半透膜を意識的にか無意識にせよ「関わりのない者」として冷静さを保っている自己のいることを筆者は一番恐れているからだ。とくにこれを強調するのはそれらの専門とするワーカーのなかに、ことばがすぎるかもしれないが、余りにも高慢^{こころもち}ちきとしかとれない者がいることをまげては通れないからだ。

他人にこの「もの差し」を当てはめることは、いとも簡単だが、きびしくさらに己に対するダイモニオンの声としてこれを受けとめ、こころの洗られるのを最大の収獲として英国のイングリッシュ・セツルメントに学んでいるのだ。

尚かつそうした点（態度）を拡大したときに、よし非科学と呼ばれ、またあまりにも人間的と評されようともこれに徹し切れたイングリッシュ・セツルメントに殊の他魅力を感じるのも筆者のみならずこれを読むものの中にいるのではなかろうかとさえ思う。もし仮りにそれが数の上で少数であろうとも筆者はそのおろかしさに心動かされることなく、このバーネットの残した足跡を自らの足でたどり、これを抛りどころ（準拠）として今後、人々との間に立ちたい…と一層の意を強くした次第である。

以下、彼、即ち、キャノン・バーネットについて記すのも、おおかたそうした願いがあることを察していただければ幸せこの上もないことである。

（二） トインビー・ホール：ユニバーシティセツルメント生みの親こと、
サムエル・バーネットの理解のために

では何故に、そうした小身者がつまり人間的欠陥を持ちながら、福祉国家の二本の柱の一方を担うほどの偉大な業績を試し得たのであろうか、読者ならずとも興味のあるところである。やや結論めいたことを言うが、筆者はおくせずその力こそ先きに示したが行きついた人間としての自覚「無力」によるものと思いたい。確かに、B・ウエップ夫人が酷評した如く、ある面で意気消沈しているかと気の小ささを思わせる次の瞬間、誰、彼かまわず向う見ずな程大胆に突進するところなどあって、いささかとまどいを感じさせないでもないが、バカさをゆうに超えて正真正銘の精神的障害をもつ者と目される程、気分がすぐれずそのむら（浮き沈み）を呈することがあった。その上、最も手きびしい彼への評として知能（切れものでない）の低さについても「切れ者でない」のように見せたバーネットの気持ちが判かる。

ただ筆者がここで言述しておきたいことはこの際そんなことは何ら意にかいせず、むしろそれらの欠陥（としておくが）を彼の短所を自らが気付いていなかったのではなく、むしろわきまえてのことつまり、十分自覚の上でのことだとしたら。いわんやしかも、その自覚の上でそれらの新しい未知な世界への道を拓いたことになるのだからこそ、彼への魅力も倍増するというものだろう。

さて、彼のビブリオグラフは夫人の手で編集された、「Samuel Barnett : His Life, Work and Friends (London 1921)」に負うところ大であるが、1844. 2. 8. ブリストル (Bristol) に、父, Francis Augustus Barnett 母, Mary Barnett の長男として誕生する。以来1913年6月17日ホーブ (Hove) にて69才の生涯を閉ずるまで彼の生涯をしてその偉業、まさしく「セツルメントの父」と称していいであろうが、1884、彼の最も油ののり切った40代にこのイングリッシュ・セツルメント＝トインビー・ホールをおこし、それに精力を傾倒したことであろう。当時ロンドンの一大スラム地帯東部ロンドン (East London) (ホワイトチャペル : Whitechapel (地区名)) のセント・ユダ教会 (ST. Jude's Church) 「コーマーシャル Commercial Street 通り28番地」⁹⁾ (現在この跡地にキャノン・バーネット小学校庭) の一角にトインビー・ホールの基を置き、自らその初代の館長として就任し、セツルメント事業を進めるかたわら、オックスブレッジ (オックスフォード・ケンブリッジの意) 両大学への報告を忘れなかった。この間偉大な指導者 (トーマス・ヒル・グリーン : Thomas Hill Green), アーノルド・トインビー (Arnold Toynbee) など、さらには若い有能な学徒たちを多くを育て社会サービスの弟子として世に送った。以来22年間この館長の役割を果たした。1906年以降正式に館長の任をしりぞき後進に道をゆずるが、同館の名誉館長として、死のまぎわまで (2日まえ重要な会議に出席している) 生涯をセツルメント事業に献身しつくした人物である。さらにもう一つのバーネットの顔のそれは、1893年8月にはトインビー・ホールの館長を兼ねながらしかも郷里のブリストルの司祭 (Canon of) に、また1906年つまり正式にトインビーの館長をしりぞくが、これはウエストミンスター寺院からの「キャノン」(Canon : 司祭) としての招請をうけたためだ。専らその後教会での業に専念することになる。だからと言って以来トインビー・ホールと縁が切れたというわけではなく、これまで同様トインビー・ホールの名誉館長として後輩たちの指導に当たった。さてここに彼の第二の顔と目される彼のかお、つまり司祭の顔があることをおぼえておきたい。

したがってまたこれらの事柄からして、必ずしもB・ウエップ (ウエップ夫人) のいう如く「意志の薄弱で、小心者」とは決して当たらない。むしろ筆者の目には、自らを深くきまえて知ってのこと、即ち方法として自己洞察にはじまり自己の洞察に終わるという徹底したよゝゝさ、つまり弱いがゆえに、その弱さを克服し、かつまたおぎなう何ものか、つまり彼の場合はまぎれもない彼の第二の顔で述べた信仰 (キリスト教) の人としての生活つまり神と人にとり奉仕するという態度がみられることをまず以て記しておかねばなるまい。だからとて全く神まかせ

でもない。つまり人としてなし得る限りのことをなす、これを最大の自己への武器として常に行為しようとした生きたキリスト者の証人とさえ思えてならないのだ。むしろ、この方向こそが、一方を「フェビアン協会」をおこし市民の福祉ナショナル化をうち立てた一本の柱に対して、指導者キャン・バーネットらを中心とした若い社会改良の情熱家らが築いたもう一本の柱イングリッシュ・セツルメントが見事に、今日でも尚生き残っているものと思う。その力こそくりかえすが、その人間の弱さの自覚にあったことを、そのエネルギーの根底にあったことをつけ加えておきたい。

で、この左右対象とも思えるバイポーラ（両極・両端の軸）は、バーネットに見られるこの新しい運動イングリッシュ・セツルメントの理念的実践的基礎¹⁰⁾にはジョン・ラスキン (John Ruskin) をはじめ、T・カーライル、マウリス、キングスレーに負うところ大で、なかでもラスキンのいう「社会思想」がその底に流れているかのように思う。そこで次ぎに若干筆をJ・ラスキンのそれについて申し述べ、セツルメントのバーネットを知る一助としたいと思う。

承知の如くジョン・ラスキンは、その師トーマス・カーライル (Thomas Carlyle) が評したように「19世紀の英国の文学史上もっとも美の渴迎者」¹¹⁾であった。唯に、我々が理解しうるJ・ラスキンは以下に列挙する限られた文献

1. 麻木米次郎著 ジョン・ラスキン 多摩書房 昭和11年
2. デョセフ・フォスター著 ジョン・ラスキン 東京ラスキン協会雑誌 昭和7年
御木本隆三訳
3. 浦口 文治著 ジョン・ラスキン 同文館 大正14年
4. 大熊 信行著 社会思想家としてのラスキンとモリス 新潮社 昭和2年

による数限られたものであるが彼のすべてを理解するに足るものであろう。私事になるが今回の海外研修にあたって(1)と(4)の本をたづさえもってきたほどだが、滞在中、数回、今は亡きラスキンのこよなく愛したカンブリア地方（スコットランド・ローランド西部地方）の静かなそうして清らかないかにも彼が愛した湖，“コニストン・ウォーター” (Coniston water) に立ちその対岸に映る2,600フィート（尺）の雄々たるオールドマン山 (Mt. Oldman) を訪れる機会にめぐまれた。ここは、たつての彼の遺言がかなえられその遺体は友人らの手で「コニストン寺院 (Coniston Abbey) の教会墓地の縦の木の下に」安んでいる。そこに腰をおろして、波乱にみちた彼の生涯を思い偲んでみているが改めてその人物の偉大さと思想とに深く心に彫みこまれ、この人物との邂逅に感銘したほどだ。（文献(1)465頁以下を参照のこと）

今その感動なり感銘なりを心に秘めながら彼とその思想とくにユニバーシティ・セツルメント、即社会改良運動¹²⁾に及ぼした影響について述べようと思う。ただ理解をする上で多少の問題をのこす。それは余りにも理解しがたい箇所に出会うからだ。そこで道案内の役をかって出たいのだが、少くとも正しく彼を理解する糸口として1, 2述べておきたいことがある。つまりラスキン理解の最大の難点は逆説指向（原理）にあるかとおもう。つまりオックスホード

時代「ニューディゲート賞」をうけている。したがって青年期は両親の期待を一身にうけて詩人として世にデビューすることであった。とくに入賞を喜んだ両親は彼にターナーの水彩画を買い与えたほどだ。また在学中休暇を利用して1837年英中部地方ヨークシャとレイクディテリクト地方、さらには北部のスコットランドへと、また39年には英国南部のコーンウォールへも遊に出た。これらの旅は先きのニューディゲート賞発表会のとき、老ワーズワースの出席を受け彼より、激励をうけた。そのことばの中には彼の不朽のころ、つまり自然愛を賞讃されたほどだ。さらにシェレーの多様性とターナーの正確さをともに感受していた点を指摘しているほどだ。その間シャーロット・ウィガー当時16才の野の花のような少女に出会うが運命だろうか、この初恋は実らずお互いに悲しい別れを交す。さらにその後ウォーデル嬢ともつきあう機会があるがこれも実らずに終わった。これらは癒しがたい精神のいたでを受けた。その上、咯血を伴うという重病即結核に病み医師から休養を申し渡されてしまったほどだ。止むなく学位を断念、ハーン丘にて静養をすることになる。その間、彼がもっとも偉大な人物と評していた詩人かつ画家ウィリアム・ターナーと会うが、二人の関係はそれ程親密なものには至らなかったようだ。つまりターナー自らがこの青年ラスキンに好意を示さなかったようだ。従ってこの一方的な出会いは若き青年ラスキンの心をいかに失望させたことであろうか、とくに彼の病状とも相俟って南イタリアへ旅立（傷心旅行）つことを思いたち、陰うつな気分と悲しみで旅に出た。途中、フィレンツェでのミケル・アンジェロの円形マリア像などをみる。が彼にとってそれ程心に楽しいものとはならなかった。また足をさらにローマにのぼし数々の寺院や建築物をみるが、彼の日記をみる限りつまらぬものとし映らなかったようだ。ついにローマを離れヴェニスに向う。ここヴェニスを初めて見るのが1835年、16才の時だ。その時（朝）の日記にこう記している。「ヴェニスをながめたあの朝、泥濘のプレント河、素朴な別荘、砂のいそ、これらすべてのものが無上のよろこびとなった。そうしてゴンドラの黒く群れてメスター水道に浮んだ景色は、深紅と黄金の日の出よりも私にははるかに美しいものであった。」と、さらに続けて「私の地上での天国」とまで神に感謝のいのりを献げたほどだった。

しかもここで養い育てられた自然への観察は後に彼の著名なる著書の一つ『近代画家論』を書く基礎となる。病いはいえ、1842年、オックスフォード大学を卒業することになるが…と同時に将来の進路についてまよい、再びスイスのシャモニーへゆき、雄山なるモン・ブランの岩をながめながら探険をかねてゆっくり考えようとした。

卒業の年、先きの『近代画家論』(Modern Painters 1843) が出版される。その中で彼が主張して止まなかったのは画家の自然に対する態度であり、彼はそれを「自然に忠実たれ」（ただ謙遜に自然に従う）ということばでそれを表現し、かつ説いた。もっともこれは、古代の画家の優れた点（美・智・真）をモデルにして当時王位美術院員 J・M・W・ターナーへの悪評に対して弁護し、その「真」を証明しようとしたものでもあった。また彼の自然観はその巻頭にワーズワースの詩の一節を挿入しているが、それは、人間を自然の友として、また弱い人間の

力の及ぶかぎりところを自然と真実のために献げることの意をうたったものだった。

偉大なるかな、この弱冠22才の青年ラスキンが覚醒したものはこの己れの弱さであった。その後の作品、即ち『ヴェニス石』1. 2. 3巻と続くが、全巻を通じてラスキンの建築にみられる生命（人間のいぶき）がここに具現化しているといつて過言ではない。つまり単なる死んだものとしたり（建築物）を見るのではない、むしろそこに建築にたずさわったあらゆる人間の労働（美）のいぶき（生命の営み）と見たことだ。ここが彼の作品と思想を学ぶ上でおろそかにしてはならないところとなるからだ。しかもここに先きに挙げた逆説的原理としての組方つまり単なる死んだ物（建築物）即客体としてみるのではなく、優れてそこにいぶき、生きつづけている建築にたずさわった人々の生＝（美）それを見ようとしているところだと思う。とくに著しく彼の思想が現われているのは彼のヴェニスの建築研究「ヴェニス石」（第2巻・ビザンチンやゴシック式建築の研究）のそれであろう。この中世ゴシックの建築の偉大さは、その労働にたずさわった職人たちの心いきを特質としてあらわしていること、つまり神への敬虔なる信仰と幸福な家庭生活から生まれたものと解釈する。まさしくそれに裏うちされた、労働のその悦びの表現に他ならないとして、「人間の意識の表現としての建築物」を展開した唯一の人物である。

そこで、このゴシックの建築であるがその後に現われたルネッサンスのそれと対比して、国民の信仰と家庭生活とをより実証的に展開しようとするのが『ヴェニス石』の第3巻であろう。いうなれば前者の敬虔なる信仰と幸福な家庭生活とによる工匠たちの悦びの結果としたのに対して、後者のそれは、国民の不信仰と醜悪な生活より生まれた……と、ことばが過ぎないでもないが「墮落した労働の結果」としたところだ。

では、その彼の逆説的原理にせまるため、これに伴う『美術論』から「社会思想」への展開を見ねばならない。わけでもそれと（美術）労働（産業）との関わり合いがそれを理解する糸口となるが、彼はこの「美術論」と「産業論」とが矛盾することなく統合されるべき全体と解釈した。つまり「美術論」即「経済論」ということになる。それには両者に同一の原理があるいは法則があると解さねばならない。

まずその第一は先にも少しく述べたが、美術が個人の健全性に関する法則を前提にしている点である。これは少なくとも「健全なる美術は即健全なる生活の表現」ということになるであろう。したがってまた、その生活の表現である労働が人格の表現たる悦びが存在するということだ。故にこの労働に、作業に担った労働者の信仰と家庭生活のいかんが表現されることになる。

そこで、彼はそのゴシックの建築物とルネッサンスのそれと比較するとき、前者の工匠たちのなかに信仰と幸福な家庭生活の表現を見、しかも彼らに共通する人格として「魂をうち込む」んだ特性を抽出した。それがヴェニスであり英国の北部ゴシック建築である。評してその工匠たちのそれを、独立性、決断性、性急性、自由性、熱狂性と美という感受性を挙げた。し

たがってこれらの特性がこれらを見るときに感じられるのだと言う。

しかも彼らのつくり出した建築物の「美」はその後のルネッサンスに比較して、きわめて不完全なるもの、不均斉なるもの、彼がとくに語意を強めて主張したものはゴシックにおける savageness（粗野）で上に述べた特性と共通するものであろう。

結局、粗野にしてはじめて、先きの正直と信仰がうき彫りにされるわけだ。つまりこの弱きの自覚の上に絶体者なる神に帰依するところで、一面心理的で弱者のように思われるものが、かえって弱きが故に絶体者への敬虔な信仰と真実とをもって、正直にしかも真面目に仕事に携さわったという、生活つまり美の表現が見られるというのだ。

したがって、こうした「美術論」から「経済論」さし当って19世紀におこりつつあった貧しい労働者への接近として彼はこの美術論を展開するのだが、わけでもそれは単に美術論ではなく、社会改良の原理をもこれによって説明しているに相違ないからである。即ち、労働者の「家庭生活の然るべき慰安と健全」の必要を説く、労働者のつくり出すもろもろの産業が国民わけでも貧しい労働者であっても、この普ねく高尚な美術の熟練と富とを獲得したときはじめられるのだと言う。したがって労働者の然るべき慰安と健全なる家庭が産業を栄えさせ富をつくることに結果するのだと演繹する。

そのために彼の社会改良はまた、信仰の復興と幸福な家庭生活のそれである。わけでも神に対する敬虔さ、つまり信仰を大切にすることで、しかもその信仰の基礎が足らぬものの自覚と絶体者への全き服従、それに人らしい正直さ（誠実）を以って労働に携さわり、人のなし得る限りはすべてをなし、足りぬところはその信仰のより所である神の介在による補足を信じきってことに当ったところであらう。ここに、先きののべた北部ゴシック建築が特定の人々のためではなく、広く全ての民衆の財となり、すべての人々に楽しまれ、愛された建築物となり、「すべての心情と共に有」¹³⁾¹⁴⁾ ったと証されたのも十分納得のゆくものだ。

美術論はこの位にして、もう一つイングリッシュ・セツルメントのモデルとなった、つまり社会改良即セツルメント運動への手がかりとして、唯単にラスキンが思想家に止まっていなかったことも書きそえて余りあるものと思う。それは、何にもまして社会改良が高尚なる美、つまり労働者の生活意識によることは繰りかえしくりかえし述べたところだが、理論と同時にそれに裏うちされた実践を伴うからだ。してみるならば、ラスキンの次の示すような事柄はむしろ、「デンマークヒルのドンキホーテ」と自らを評したほどであるが、ひょうひょうとして、セイント・ガイルの教会敷地内の道路の掃除に、自ら箒をもち、ボランティアの先頭に立ったのも、また「ラスキン茶店」なるみょうなる茶店をつくり安価で労働者に茶をサービスしたのも、はたまた後年、「労働者大学」を設立したのもロンドンに「模範地主制度」をつくるのも決しておあそびではなからうと思う。確かにどれ一つとっても効を奏したものはないが、社会改良への途を拓く前哨としての役割は十分すぎる位担ったとわたくしはおもう。

つまり、その後にくる東部ロンドンでの労働組合運動を通じて社会改良の道を拓いたフェビ

アンの指導者トーマス・カーライル、ジドニ・ウェップ等々、それにキャノン・バーネットを中心とするセツルメント運動となつて、東ロンドンに見事な大輪をつくって花を咲かせたのも、決してこのデンマーク丘 (Demmerk Hill) のドンキホーテ、おどけ者ラスキンとは無縁¹⁵⁾ではなかったと、墓にもうでた感想から一層意を強くしたところである。

それに、殊のほか、ベニスにせよ北部ゴシックにせよ、これらのモデルはいなか (田舎) でしかも、彼のユートピアなるものがしばしば酷評をうけ、うけ入れられなかったのも、実は近世の政治や経済の理念となつた「自由」と「平等」ともに否定したからであろう。事實は彼は近世のステータスシンボルであつたステームやそれによる機械にあえて逆行するかのようになり強い反対の意を表したからだ。しかも反面こうした態度も、その彼の「美術論」の中核たる「真」の労働を疎外するものと見た点でむしろ卓越した社会思想家ともいえる。

以上のような社会改良という人間の制度、産業にしてもこれを担う人間ワーカーの信仰と家庭生活の然るべき幸福とを土台にしたこと、さらにはその改良において人間関係を改良運動としてのイングリッシュ・セツルメントに多大な影響を与えたことは論をまつまでもないことであろう。

後方、またこの運動の祖キャノン・バーネットを理解する一助としてラスキンを挙げたが事実トインビー・ホールの建築の中には、オックスホードの北部にある荘園 (ゴシック建築物) をモデルにホールがつくられていたりするもの、また近隣の人々に社会改良としてふさわしからざる、つまり東部ロンドンのスラム地区の中心にモデルとして荘園生活のシンボルであつたゴシックをとり入れて建てたところなど、それにその生活様式つまり中産階級の生活をこのレジデントとして入植して来た若いオックスビレッジの卒業生たちがここで生活することの新しい意味は、こうしたレジャーを人々に示しこれを楽しんでもらい、ひいては「すべての心情と共にある」ことを実現しようとしたところにあり、決して貧しい人々から隔離しようとするものではない。確かに当所は余りのかけ離れた生活故人々がここに集まることはなかったが、ラスキンの洞察同様にこのゴシックを人々が楽しむようになったこともあながち事実と反することではない、むしろこの自分とはかけ離れているかも知れぬがこのゴシックの中に生きつづけている人間のおもい、つまりこころ (信仰)、正直な神をおもうこころと正直に人生を生きるおもいと幸福な家庭生活から造り出されたそれを見るものとしてあえて東ロンドンの貧しい地区にふつり合いながらも建物を置いたといつていい。その他これに類することは、地区の子供たちの品性の形成に休暇を利用して、田舎つまり農村への旅行会を計画し、これをすすめてきた。これなどもその光に照らしてみれば、単なるレジャーでないことはすでに分かるであろうし、まわりくどいがこれを通じて子供たちのこころの中に大自然の規則なり法則なりを、つまり神をうやまうこと、幸せな家庭生活の事実を見せたのである。

ラスキン紹介の最後になるが彼の人生観をみておきたいのだが、その『Foy's Letter.』LXXV 11 の中にそれと思われる箇所のいくつかがある。その中のひとつに曰く「人間も草の葉にも

自然の普遍的なる法則，死すべきもの，進歩すべきもの，変化すべきもの…等がある」…と，しかもその中にあるものは不完全さとしてとらえたところで，むしろこの不完全こそ生命のしるしと解釈しているところに注目すべきものがあるようにおもう。

したがって，この人間にとってもっとも正直なる特性はゴシックにみられる工匠たちの自らの粗野たる自覚，これを強調した点がここにあり，でこの粗野こそ，不足するものこそ最高の美という逆説が見事に理念と実践とが一致し統合する全体となることを説いている。その一つがトインビー・ホールというイングリッシュ・セツルメントの初の実を結んだ花の一つであると解釈したい。

(三) 人格形成期からセツルメント前史まで

茲ではS・バーネットの思想形成上，いや人格形成上欠くことのできない第一集団 (primarily group) さし当り家族集団 (family 以下家族と呼ぶ) のそれを見ておくことにしたい。

先きに見た如く，彼がときをあげたのはヴィクトリア前期である，しかも強烈なコンサバティブ(保守的)な意見をもつ父ともの静かな母のもとでその少年期をしかも静かなブリストール “Bristol” にて過したことは，彼の性格 (ベイシク・パーソナリティ basic personality) を形成する上で見落してはならないもの (environment) があるに違いない。また，成長してオックスホード大学 (Wodham college) に入学，ここでの学友との交流とくに学寮のチューター (寮監兼学習指導者)，その他さまざまな社交界での人的交流などが，さらには卒業後二カ年の Winchester college における大学院の研究生活など，さらにはその間市民戦争後の米国への旅行を経て，帰国後フリマレトル牧師 (Revernd, W. H. Fermantle) の招請をうけて彼のもとで副牧師としてセント・メアリ (Bryauston Square, Marylebone) の牧界に入る。その間，2カ年牧界に従事しながら社会事業家のスミス (Sathwood Smith) の孫，オクタビアの影響は彼のその後のセ・ヒルと交流，前者のCOSの設置に，後者の住宅改良事業に協力することになるが，その影ツルメント運動と事業に大いに役立ったことはあえて茲で申すまでもないことである。

以上，大雑把に述べたが，これを著者は三期に別け以下説明をするが，その後の彼のイングリッシュ・セツルメント事業の足跡をたどるとき理解の一助となり，合せて品性の形成とセツルメント運動の思想的背景を理解できるかと思う。次にあげる「C・S・バーネット69才の生涯」を参照のこと。

Chief event in the life of Samuel Barnett.

(キャノン・バーネット69才の生涯)

Birth, Feb. 8th 1844 1844 生

Oxford-Wadham college 1862-65

Winchester	1866
visit to the U. S. of America	1867
curate at St Mary's Maryibon	1867-1873
marriage Jan. 28th 1873	1873
vicar of St Jude's, Whith chapel	1873-1894
visit to Egypt	1879-80
warden of Toynbee Hall	1884-1906
tour round the world	1890-1891
Canon of Bristol	1893-1906
curate of St. Jude's, White chapel	1895-1898
Conon of Westminster	1906-1913
Sub-Dean of Westminster	1913
death Jun. 17th 1913.	1913 没

(三)一(1) サムエル・バーネット (誕生から青年期まで)

1844年、アボン州 (Avon) ブリスト (Bristol : 5, Portland Square, Bristol)¹⁶⁾¹⁷⁾ に、父・Francis Augustus Barnett, 母・Mary の長男としてときをあげた。結婚5年目にして生まれた子で、母メアリ35才の時の誕生である。また1846年7月3日2年後2つ違いの弟(男の子 : Francis Gylmore Barnett) 出生となるが、とくに幼年期における兄弟関係には注目すべきものがある。つまり彼らの兄弟愛は見事で互いに信頼といつくしみとでしっかりと結び合わされたと記録されている。しかもそうした関係は成人後もつづきや生涯続いた。彼らは毎週のようにお互いに何につけても手紙にて連絡をとるということを止めなかったほどだった。

ところで、彼がどんなに両親の期待を一身に受けて生まれついたか述べておこう。一つは先きに示した如く母親が35才の高令者出産のときの子であったこと、さらには両親の結婚5年後にしてできた初子であるということでもわかるとおもう。その記録をみると「1844年2月8日(朝)、父F・A・バーネットと母メアリのこの小さな家庭に一個の小さな子供が誕生することになった。それは大きな期待をもって、長く待ちわびていたものであった。ついにその朝、男子出産、普通の子よりやや頭の大きな子で、その小さなかわいいもみじのようなその手や足が…」と両親たちの喜びようが記されていることから。

そこで次ぎに彼らが育った家庭の環境についていくつか書きとめておこう。

まず家族だが、父F・A・バーネットは中産階級で、アイロン・マニファクチャで当時手広く仕事をしていた実業家である。これ又余談になるが、英国ではじめて鉄製のベッドをつくって、これを普及させた人物でもある。今日でも彼の考案し作製した鉄ベッドが「バーネット・ベッド」という商標となって名を残している。こうして実業家として成功するかたわら1894,

5年には救貧法による学校に関するコミティーのメンバーとして活躍した人物でもよく知られた地区の名士であった。

ところでこの父親との関係だが、これについてはそう多く記されてはいない。ただ父親が中産階級の実業家であったこと、さらには強力なコンサバティブな意見の持ち主であったことからして容易に彼の幼少期における性格形成上の役割の大なることは凡そ察しがつく。ただ数少ない記録の中でとくに二、三、父親との関わりを知る貴重な事柄がある、その一つは、しばしば父親にその仕事場（鉄工場）につれてゆかれ、その作業場を見学したことだ。そうしてその当時の印象をこう記している。即ち、「しばしばこの工場や作業場において鉄ベットの、名いりのバーネット・ベットを見た…」少年サムエルはこのオールド・ファッションのどっしりとした重い鉄のベットを見てそう記しているのであるが、彼なりに深い印象をもったことは後の彼の思想と実践のなかにコンサバティブな姿勢を理解する一助となりえよう。即ちわれわれは「このオールド・ファッションの」と記された部分に注目してほしい。つまり、その古い花模様、またその形といいそれにほどこされたデコレーションに強く心をひかれていることがわかる。

つまり直接的に父親から口で子に伝達されたかは明らかでないが、父親の強いコンサバティブ（保守的）な考えの持ち主であったがこのベットひとつからも理解できるところだ。

その二は、父親とアイルランドへの旅行に出掛けたことだ。何の目的であるかはわからぬが、その時の印象も性格形成上いやサムエルのトインビー・ホールにかけた情熱のなに程かを理解できるものと思う。つまりこの旅は彼をしてはじめて貧しい人々の生活を見る経験となったことだ。アイルランドの一つの町について彼の記録の中には「一本の細長い、しかもくねくねと折り曲って居並ぶ街並とその道を通ってすすむと……そこには…凡そ想像がつかぬほどの貧しい住人たちがひしめき合って住んでいるのをわたしはおどろいて見た。」¹⁸⁾…と、我々が想像するにこの小さなサムエルの心をどんなにか痛めたことであろうかとおもう。

さらに、彼の人格形成上大いに影響があったと考えられるのは、父方では材木商を営む祖父 Samuel Augustus Barnett、母方ではギルモア家の祖父である。とくにこの母方の祖父、船舶のオーナーだったがこの彼との出合かがそれを語るのに欠かせないものの一つだ。彼は多くの船舶を持ち広く外国に店をもち取り引きをしていた。したがってまた、あらゆる経験と知識に富んでいた。その上すばらしい品性の持ち主であったことだからその豊富な経験と知識、それに話はずきとあって、あれこれ彼の武勇伝などをおり混ぜた話はこれを聞くサムエル自身に大変な興味をもたせた。その上老夫婦が住むここはブリストルの川の見える丘の上（Hot Wells Clifton）に居をかまえており、ここからながめる景色は幼いサムエルを楽しませるのに十分なものであった。唯に楽しむだけでなく、広い庭と川の見える景色とそれに合するような祖母の美しい家庭生活にふれ、彼サムエルの幼少から少年期における最大の幸せな時期となったと記すほどに、またセツルメント事業の一環として、館を訪れる地区の子供らに田園地方を選

んで二・三日宿泊の旅行会を考え出したのも、ここでのこの生活とも決して無縁ではないと思う。このギルモア爺さん1859年86才にて死去するまでが、つまりサムエルの品性の形成期からすれば幼少よりオックスホード大学に入学するまでのこの人格形成のきわめて重要な時期にこうした環境が備えられたことは見落してはならないものがあるだろう。

またこの時期、教育は「専ら家庭で」とあるが、この理由の一つは健康が優れなかったことを挙げることができる。記録には「しばしば健康にすぐれず、しばしば持病のように hypochondriacal に悩まされた」¹⁹⁾ とある。これが元で専ら教育は家庭で敬虔なキリスト者、母親メアリの家庭教育（しつけ）とチューターのもとで行なわれたので、ついに公学校にゆく機会を失なった。

こうして16才になるまで家を離れることがなかったが、その年（1858年(Cambridge Junior Local Examination)にかよいその準備をしていたが結局また先きのヒポコンドリーに病み止むなく断念せざるを得なかった。

(三)一(2) オックスホード時代

ついにその4年後（1862年6月）独学でオックスホード・ワドハムカレッジ（Wodham college, Oxford）に合格し、その9月には学寮にレジデント（寮生）として入寮した。

両親の期待は、将来保守党の議員になるかそれとも牧師として立つことであった。ところが、彼らの期待に反して入学したワドハムカレッジそれ自体、それをかなえる適切なものではなくなりつつあった。つまりかつてはあらゆる科学の水準をゆく伝統カレッジであったのだが、彼の入学当時すっかりその伝統が地に落ちてしまっていた。そんな中で彼のカレッジ生活ははじまるが、それを知りうる記録らしいものは何一つない。ただ寮監のドクター・シモンド Simmonds (Warden) と交わった程度で、生涯まで続く“竹馬の友”などといった友人など誰一人として出来なかったらしい。さらにそれを作るためにあらゆる社交界や協会にも進んで出席することもしなかったようだ。

それでも、差程親しい間柄でないにしてものちに彼の理想イングリッシュ・セツルメントを東部ロンドンで実践する場合大いに力となってくれた仲間たちとここで出会うことになった。一例を挙げると、S. タレボー、M. クリートン、アイトケン、E. H. J. チェーン、H. D. トライアル、G. F. B. セイレズベリー、T. G. ジャックソン、B. ヨウエルらであった。

S. Talbot (Bishop of Rochester)

Mondaill Creighton (late Bishop of London)

W. H. M. H. Aitken (the Missioner)

E. H. Jeane (the Judge)

H. D. Traill

G. F. B. Saintsbury

T. G. Jakson (the Royal Accademiccan)

Benjamin Jowell, (Social Workers, Boad Churchman)

卒業は65年、法学と歴史を修めBAを得、その名誉あるセカンド・クラス (a second-class Honours) を受けるほどだった。

その後は引きつづき Winchester college にて MA (修士) の勉強をつづけるが、この間の理念がとくにイングリッシュ・セツルメント運動を生み出すフレイム・オブ・レフレンスの期間になったことは先きにのべた通りだが、その研究の中心は「culture comes by contact」, “文化は交わりによりてもち来たる” とでも訳出できようが、それに基いて「学生ユニオン」(Student's Union) なる組織を主張したものだ。これは少くとも社会的交流 (貧富) のための組織活動で様々な機会 (opportunities) を準備し、これを貧困層に提供する知的食物がそれでこの食物を通じて最も適した双方の融和 (assimilate) を計ろうとしたものである。また、この相互の交わりを通じて、話し合うことによる融和運動の必要を説いているのだ。まさしくセツルメント研究と実践と言っている。

この研究を半ばにして1867年市民戦争直後ニューヨーク、ボストン、ヒラデルヒア、ワシントン、バルトモア、リッチモンドなどを経てニューオリンズへ単身旅に出かけた。もっとも、この旅は米国のビジネスマンに紹介をかねてのものだが、そこで彼は当時の黒人奴隷問題を目撃することになった。彼の同情心は北の奴隷開放原理に平等と国民主義の理念に適ったものだが、それまで彼の南部州の不明確あやふやな黒人奴隷の解放理論であったことを思い知らされた。

「dignified generous-hearted free-living ex-slave-owners of the Southern States」をみて、次のような感想を記録として残しており、その解決のため「全ての人々に選挙権の権利をもつこと」などなど、「保守主義のアトモスヘアーのもとで生まれ育った私が米国でみたものは、あるいはまた聞いたものは、すべて自分の保守主義の考え方を完全にたたきめされた」と言いました、社会利益 (Social interests) や言語の必要を英国の人々にアピールする必要をかんじた。何よりもまずこの米国の旅での、収穫は社会改良家たちが何も分かっていないことに彼自らが深く洞察したことにある。9カ月余りで本国のブリストルに帰る。ここで修士論文をまとめ1896年学位を得た。こうして彼の社会改良家としての正確なスタートは次の時期に移されることになる。

(三)ー(3) メリリーボン教会にて牧師見習い時代

次いでその第三期は1867年12月22日、米国より帰国後5カ月、牧師見習としてW・H・フレイメントル牧師の招請をうけロンドンのメアリーレボーンのセントメアりに赴任した時から始まる。ところでこの時代特筆すべきものが二つある。その一つはフレイメントルとその C・O・S (Charity Organisation Society) であり、またオクタビア・ヒルとの出会いであろう。とくに

このフレマントルのもとでの2カ年間、牧界に入り牧師としての仕事に従事するかたわら、C・O・Sの設置²⁰⁾に協力することになる。その上、同地区の住宅改良家オクタビア・ヒル(Octavia Hill 1838-1912)との出会いとも連なるが、当時彼女はスラムの住宅改善を志し、その彼らの悪習慣より彼らを救済しようとする改良家J・ラスキンがオクタビア女史の仕事に側面的な援助を、つまり資産をもってロンドンのメアリボン同地区のスラムに56年契約で借地し、これに3戸の住宅を建設して貧民に貸し与えていた。さらに78ポンドを投資して自分の住宅を兼ね同時に市民のもろもろの相談に応ずるための人事相談所をたて増して、あらゆる相談事に応じた。したがってまた、この彼女の仕事を協力することになるが、とくにこのオクタビア・ヒルとの出会いと交友は彼のセツルメント事業にかりたてた最も強力な推進力となった。したがってこれはまた別にオクタビア・ヒルのスラムの住宅改良事業のところで詳細に述べるつもりだが、ただ一言、この指導者のもとで当時集金係をしていたヒルの有力なワーカー、ミス・Henrieta Octavia Rowland(後にバーネットの夫人となる)とめぐり合うことになるのでそれを記しとどめておくことにする。やや蛇足になるが、彼らの結婚式でのエピソードには多少興味あるものがある。その式場に当てられた教会堂はこの地区の貧民たちでいっぱいになり、彼らから門出の祝いを受けたことなど、オクタビア・ヒルが記録²¹⁾²²⁾しているところだが、察するところこの地区でのバーネットの働きが貧民たちに受け入れられていることを物語るものと言えよう。

ただ少しく先きに述べたC・O・Sについて述べておくと、これは今日、「慈善組織協会」と呼んで社会福祉(学)の基礎理論の中で学習するもので、重要なものの一つとなっているものだが、この貧困地区にはじめて組織したこと大いに意味があり、この設立に後のイングリッシュ・セツルメントの生みの親、キャノン・バーネットがフレマントル牧師を助けて加わったことで、ここでのこの組織での経験、とくにこの理念、即ち友愛訪問“scheme of friendly visitor system”の参加から貧民の生活状態を知る最も有力な手がかりとなった。しかもこの友愛訪問の結果、それまでの救貧法による貧民救済に若干の疑問を生じるに至った。従来の貧困の結果がその個人の怠慢によるのだという解釈、さらに彼らに対して無差別に金銭やものを施していたことなどを指摘し、その改良をつよく主張した。また改良は poor law relief と private charity がかえって貧民たちの志気を落す結果になっているので、この双方をうまくコントロールすることだと述べた。

(三)一(4) メリーボンからホワイトチャペルへ

これは先きの「キャノン・バーネット69才の生涯」の年表よりヘンリエタとの結婚後、つまり1873年以降となるが、キャノン・バーネットを知る最も良い時期ともなる。なぜならばこの期間がイングリッシュ・セツルメントをみる礎石のそれであり、もっとも情熱的に彼の主張するセツルメント運動の展開する時期となるからである。当時無牧師教会になっていた東部ロン

ドン・ホワイトチャペルの教区、セント・ユダ教会へ赴任する決心²³⁾をするからである。もち論見習牧師としてではなく、正牧師としての赴任だが、唯ひとつの問題はこの空席になっているセント・ユダ教会即ホワイトチャペル教区は極貧地区であったこと。したがってその間決心するまでにはドクター・ジャクソン (Dr. Jakson) とバーネットとの間に書簡の往復があるが、度々彼は「性急に決定することなきよう」とアドバイスを与えてくれたほどだ。何故ならばこの地区の貧困と貧民が最低の教区となっていたからでジャクソンの友人たちはその決定に躊躇しそれを心配したからだ。それに対しこの若いバーネット夫妻の決意はかたく、その上C・O・Sの同僚オクタビア・ヒルも同地区の作業を側面的に協力してくれる確約あり、ためらうことなくこの新任地にむかうことになった。

次ぎに最悪の教区ホワイトチャペルについて若干補足しておこう。ここには多くのアイルランドからの難民²⁴⁾や貧しいユダヤ人²⁵⁾たちが群がっていた。彼らの多くが唯単に貧困のみではなく、貧困からくる不良住宅の問題、不衛生、犯罪、その上売春などなど、凡そ想像を絶するほどの非行多発地区²⁶⁾になっていた処だ。従って当面貧民の悲しみと明日に希望をもち得ないその日ぐらしの労務者たちのいんきくさを思うとき、その彼らの悲しみをいかにして解消するかが、オクタビア・ヒル女史の元で訓練を受けた二人の挑戦であり課題でもあった。

この間の事情を1872年12月10日のJ・ジャクソン氏の手紙からうかがい知ることができる。即ち、「ミスター・ヘインズ氏 (Haines) の切望でセント・ユダ教会ホワイトチャペルの移動を許可することになった。それにつき貴兄にその空席をうめてもらいたいのだが、貴兄も承知の如く、セント・ユダ教会の教区、ホワイト・チャペルはおそらくロンドンでも最も悪い地区ではないかとさえ危惧する処だ。おまけにおびたしいユダヤ人の密集している地帯の一つでもあり、そこ (ホワイト・チャペル) には例の泥棒など横行する無法者の集りの地区である。この教区には現在6,000人ほど住んでいるが教区の収入は約300 (ポンド)」… としたためユダヤ人と泥棒の多い処、つまり犯罪の多発地区の様子を指摘している。ところであえてドクター・ジャクソン氏の手紙をまたずともこの地区一帯がアイルランド・ユダヤ人の密集地でも貧しいが故に犯罪の多いところとなっていたことは西ロンドンの住民たちの驚異的であった。彼らはこの地区をあらわす (表現: 差別用語) の一つは “criminal population” “Jews and Thieves” などの差別ことばがあったほどだ。これを不用意に用いられていた。したがってまた、これからして凡その察しがつくとおもうが。したがって又この地区の住民に個別的な慈善家の同情をかい彼らの施しが、凡そ無差別に与えられていた。これはバーネットらが最も恐れていたことで、逆に人々のところがすさぶれていく逆効果から眼を離すわけにはゆかなかった。

市の統計から、この地区の貧民の数、貧困、病気がわかるが、貧困層は当時ロンドンでも最も多く、まさに「あふれ」という表現を用いているほどだが、実際その通りで、この地区には76,000人の住民がいた。しかもその内、凡そその4.7%はアウト・ドア・リリーフ (out-door-relief) 院外救助の対象となっていたことが記録されている。さらに今1873年の『The Medical

Inspector for Whitechapel Report』によると、地区の子供の死亡率の高いことを記録している。例えば5分の1は1才未満で、さらに3分の1は5才未満で死亡していることがわかる。しかもこれを記録した役員たちの高い死亡率の原因は貧しい住宅事情にあったことを指摘している。例えば1871年の役員（視察官）の報告によると、『Whitechapel Union, Report of the Guardians.』1871 一部屋に、（たとえばゴールストン街（Goulston Street）を一例にとれば、その広さは12(尺)×9(尺)×7(尺)奥行・巾・高）約4.5 畳に男1人、女性6人それに3人の子供という世帯で、ときには家族に混ってブタなどの動物がこれに同居するというものすさまじさだ。またおおむね半分のものつまり44名は1ないし2居室であったと報告している。やがてチャールズ・ブーツ（Charles Booth）による1889年のホワイトチャペルの調査²⁷⁾では、彼のいう“poverty line”以下の生活者が40名も占めていたことになるが、バーネットがホワイトチャペルに赴任していった当時（1872年）ほぼそれに近い貧民数であったことはあながち的をはずれているとも言えない。

ついに二人の決心はメアリー・ボンを去り“criminal population”と“Thieves and Jews”の町ホワイトチャペルのセント・ユダ教会に赴く。

赴任にあたってバーネットが計画したことは、当地の博愛主義者やジャーナリストらを教会に集めて、この東部ロンドンの実態調査（discover East London）をはじめることであった。その目的とするところは、東ロンドン地区内の診療所、公衆バス（浴場 washhouse）、学校、図書館などの記念資源とその然るべく人材との連絡網をつくるものであった。またセント・ユダ教会でのプランの中には、その第一の目標としてこの地区のとくにロンドンの無人格化（貧民たちの良き隣人のない町の意）に対して、それにアトラクトするもので教区民の組織づくりを呼びかけるものであった。なぜならばこの貧民階級への物理的セグリゲーション（segregation）隔離と強力な社会的圧力の欠如に、先きのロンドンの無人格化の原因をみたからだ。実際こうしたバーネットの洞察は1870年頃から着手されその Church Reform Union での卓越した人物として活動をはじめた。この組織は貧民の日常の諸々の必要を充足すると同時に、すすんで教会が彼らとの物理的距離の隔絶を改良しようと試行したもので、いわんや近密な人間関係をつくり出そうとしたものだ。

またこの組織づくりにはイングリッシュ・セツルメント、トインビー・ホールのトインビー・ホール評議員会の初代議長を歴任した P.L. ゲル（Philp Lythelton Gell）と強力なセツルメントの協力者（推進者）T・H・グリーンやアーノルド・トインビーがこれに加わった。かたわら他バーネットはセント・ユダ教会に目をとめ「死にかけている教会」（moribund condition）の状態をうれい、まずバーネットは教会員の霊的復興に力を入れることに意を用いた。これは当時セント・ユダ教会の教会員は全く教会など余り好ましいものとは思っていなかった。教会に対する関心の低さなどまさに「死にかけている教会」であった。このことは例のバーネットの弟に出した手紙の中に教区民の霊的低悪さを窺い知ることができる。そこでまず教会ユワイ

ヤー（聖歌隊）や小学校（教会学校）の再興などに力を入れ、これはまたこれらを通じてこの教区民に教会の使命を自覚させること、さらにはあらゆる改良事業のボランティアとして社会活動の前哨となることであった。

そこで週ごとの日曜日の礼拝（Sunday Service）をおこし、日曜学校を再開し、また教会でのオラトリオ・コンサートを催したり、時には絵画をかけて人々を教会に集めた。とくにこの絵画はウィリアム・モリス（William Morris）自らが飾りつけを指導した程で、いろいろな思考をこらして教会の復興を期した。その他、改良事業としてはベター・ハウジング（Better housing）のキャンペーンや衛生法の適応を強調するためのキャンペーンを試行した。そのかわら図書館やプレイランド、公衆浴場それに施療所などを建て、住民の福祉に供した。

また各種委員会の組織をも見逃すわけにはいかない。彼自らも同区の救貧委員（Guardian）の（Whitechapel Board of Guardian）メンバーとして救貧活動をつづけるかわら、その救貧活動の一環として「Metropolitan Association」のブラチンを同地区に組織した。これは“Befriending Young Sevants”を目的としたもので、まさしくボランティアの社会活動の組織である。そは他「Sanitary Aid Committee, Children's Country Holidays Fund」等もあった。

他方彼の牧する教会では多彩な行事を試みたがその一つはまず「教会ライブラリー」である。ときにはここを利用して定期のアート（絵画）の展示会を催しもあり、大学拡大講義（University Expension Lecture）を開いたりもした。また子供や成人のためのランニング・クラブ（ran a boy's club (1883)）それに（a men's club）など、前者は85人、後者のクラブには180名からなるメンバーを組織づけるに至った。当然これらの活動は地元の住人たちを対象としたものだが、それはもとより遠くウエストエンド、ロンドンの西部地区からもこれに参加するようになった。彼らと一緒に時にこうした成人クラブの催しものとして、ケンブリッジやオックスフォードへの“大学ツアー”に、またロンドンをはじめその周辺の郊外へ、これは荘園の立派な建築物を見学することを目的としたものであるが、この他機会をつくっていろいろなエクスカージョン（小旅行会）などのプログラムをつくって出掛けたりもした。

従ってまた、1870年にはつのイングリッシュ・セツルメントのトインビー・ホールが出来るのは自然の結果と言えるほど、その準備がバーネット夫妻のセント・ユダ教会への赴任と同時にすすめられていたと言って過言ではなからうし、それなしには考えられない。

こうして1872年より9年間（1881）この教区の牧師として東ロンドンに入植してセツルメント事業の道を備えかつ拓いたことになる。しかもこの期間中セツルメント事業前歴では新しい段階を迎えることになるが、それはセント・ユダ教会の近くウェントワース通り（Wentwerth Street）に古い家を買って求め、婦人の「レント・集金係（家賃集金人）」の一組を居住させ、大いに貧民のモデル（中産階級の見せもの）とすることにおった。これがきっかけで1883年には「East End Dwellings」を設立した。これは第一に集金人などのワーカーのためのアコモデーション（宿舎）を準備することと、当時徐々に進められていた住宅改良一掃事業（スラム・

クリアランス : Slum clearance program) に伴って彼らの家を立ちのきをせねばならなかった。そのため、彼らを一カ所に収容する必要があった。さらにワーカー以外に一般の労働者を対象に住宅を安価で提供できるトラスト (Peabody Trust) をつくり、とくに未熟練労働者のため、ドックに働くその日ぐらしのホームレス労働者に、その他未熟練労働者として同地区のスラム街に居住していたおびただしい数の男女たちにそれを備えるものであった。この事業計画はすでにオクタビア・ヒルのガイド・ラインにもとづくものでモデルのブロックの(労働者住宅)よりもさらに快適なもの、また労働者が切に望んでいるものをつくることであった。しかもこれに加わったバーネットらの計画は水をいちいち集合栓からバケツで水をくみ上げてそれを運ぶのではなく、各部屋に管とドレインを通して各室に水を運び、その労苦を軽くしようというものだ。しかも唯単に労苦を軽減するのではなくすすんで上・下水道の完備することにより水から流行する様々な病気の伝染源を防止する疫学上、または衛生改良事業を兼ねたものを実際に労働者住宅にプロジェクトするためのものであった。この最初の労働者住宅を「Katherine Buildings」と命名した。これは今日カサリン・ドック附近に数ブロックを建設したものだ。地下一階地上四階の五階建てで今日いうアパート式のもので一室一室独立したものだ。これが後にいう「細胞の家」(長屋) (cell house uniform, cell-like)。ところがシンク(洗い場、台所)やトイレなどは各室にはなく一カ所にまとめ(共同使用)たものだ。それでもバーネット自身はこれらの数ブロックに大変ご満悦であったことが彼の弟への手紙からわかる。

その他、婦人の集金係には“College Building”と称する建物を用意、1884年にはイングリッシュ・セツルメントはつの館、トインビー・ホールをコマーシャル通り (Commercial Road) に建設、いずれもこれらのワーカーのための建物は単に集金人の宿舎を提供するだけではなく優れて、集金業務を通じて貧しい住民と接し、その人格的な接触を通じて彼らに何ほどか人格的な触れ合いと信頼などといったなものかを啓示できるものと信じていたからだ。それこそバーネットやその同僚者、オクタビア・ヒルなどがはじめた“良き隣人”運動 (Good Neighbour Campaign) の強力な推進者で、貧しいテナント (テナント) はもとより、その借地、借家人との間にフレンドシップをつくるためでもあった。1882年のバーネットの記録によると徐々にこのフレンドシップが板につき着実に事業が展開していることを窺い知ることができる。

やや蛇足になるがこのバーネットのもとで集金係として協力した人物のなかには、後にシドニ・ウェップと結婚して、フェビアン協会をつくりその理論的指導者となったミスB.ポッター (Miss Beatrice Potter) やその他ミス M.ネビンソン (Miss Margaret Nevins) などがいた。「彼女たちは地域社会の性格は自分たちのこの地区への貢献即ち個人的な影響にかかっている」のだとさえ考え、情熱的にこの仕事に協力した。

これらの計画と経験をもとに1888年、同地区のカンセル (評議委員会の専門委員会) に『A Big housing Scheme』なる意見書を提出することになる。もち論その計画書の中にはすでに社会改良事業に開かれたトインビー・ホールでの経験がもられていることは論を突つまでもな

いことだがそれが地元をはじめウエスト・エンドのロンドナー（住人）たちにも支持されるようになった。これは即ちこの地区におけるセツルメントの大理想である「良き隣人」が定着しつつあったからで、その経験と精神がもたれた社会改良事業の提案だけに、カンセルの同意を得るところとなったことを附言しておきたい。

(三) (5) イングリッシュ・セツルメント＝トインビー・ホールの前史

メアリー・ボーンからホワイトチャペルでもう一つ述べておかねばならないものがある。それはオックスフォードやケンブリッジ両大学への東ロンドン博愛主義事業の報告会である。

この報告会の過程ではじめて、ユニバーシティ・セツルメント計画の大綱を披露することになるのだが、1883年11月17日でのオックスフォード、セント・ジョン・カレッジである。その新卒業生達にソーシャル・サーバントとして、“ユニバーシティ・セツルメント運動”に献身するよう呼びかけたことにはじまる。今若干その呼びかけの大綱を記録より要約してみるが、凡そ次のようになろうかと思う。即ち、東ロンドンへの住み込み（settlement：入植の意）²⁸⁾²⁹⁾
³⁰⁾³¹⁾³²⁾これを一にも二にも旨とするものである。彼らは各々自分の専門、つまりある者は牧師として、ある者は法律家、医者、あきんどなど各々職をもち、仕事をしながら、しかもその上彼らの余暇時間を社会活動に参加献身するためのものであった。具体的には(一)、各種慈善団体のボランティアとして、(二)、消費共同組合 Co-operation Association やフレンドリ・ソサイティ友愛協会：(Friendly Society)のアシスタントとして、さらには、(三)、地区委員会や委員 (Gurdian) のメンバーとして活動することを意味していた。

更にこの会でバーネットは、具体的な彼らの役割について述べている。その若い大学出のボランティアが東ロンドンへ入植するが、各自それぞれ別の処に住むのではなく、一カ所に居を構えて住む「セツルメント・レジデント」と呼んで、これが「ユニバーシティ・セツルメント」の中核となることを説いている。しかも重要なことは次に述べるような、「セツルメント・レジデント」の役割しかも各々独立した三つのセパレートからなる役割をあげた。即ち、(一) 労働者階級のあらゆる情報を蒐集すること。(二) より生産的な生活、つまりより豊かな生活を営みうるようその方法を指導すること。(三) フレンドシップをつくること、即社会的調和の高揚などなどであった。

こうしたバーネットの「ユニバーシティ・セツルメント」の計画は、先きの（1883年ユングレグイショナル教会の牧師により）に公刊された『The Bitter Cry of Outcast London』がウエスト・ロンドンの住人たちをセンセーションを巻きおこしたもののだが、オックスフォードでの報告会の数週間前に出版されたもので、バーネットはこの中から東ロンドン地区の悲惨な状態を学生達に引用している。この出版物については後程細に述べる機会もあろうと思うのでここでは若干の紹介のみにとどめておくが、東ロンドンの貧民窟の「ホローぶり」を書いたものである。著者は先に示した如く一教会 (Congregational Church) の牧師（伝道師）A・メアー

ンズ (Andrew Mearns) で、もともとこれは教区員のキリスト者としての自覚をうながすために執筆されたものであった。1883年の秋から翌年の春までシリーズで労働者階級の住宅事情をとりあげたものだ。従ってこれまでこうした形で住宅問題をかかげたのは皆無で、これが最初ではなかろうかと思う。彼は訴える。「最も深刻な社会問題だ」………とそして、19世紀の前半のロンドンのスラムについて、その「ホローさ」(恐怖)といきどおりとについて示したものとと言っても良からう。さらにこれは1883年の11月の短期間、イラストレーテッド ロンドンニュース誌 (Illustrated London News) にこれが掲載されることになる。少し余談になるが、英国人独特の行動様式の一つは行列 (queue standing) があるが、この出版された日には書店に長蛇の列が並んだほどその売れ行きが良かったという記録さえ残っている。

さて、これまでロンドンのスラムについては、数多くの執筆者達がいる。小生の学んだ限りにおいては、Mayhew, Dickens, Gavin, Sula, Kingsley, Bosonguest, Grant, Beame, Greenwood など、さらに忘れてならないのは、Chadwicks の報告書などがある。第一に挙げたメイヒューについては、E. P. トンプソン (Thompson), 『The Polical Education of Henry May'hew』 (Victorian Studies VI No 1 1967) さらに C・ディケンズについては説明するまでもないことと思うが『Oliver Twist』『Household Word』などが、さらに数年前オックスフォードから出版された Alexander Welsh, The City of Dickens』 (Oxford University Press 1971) が、またガービン・スーラ・キングスレー・ボサンキューなどのスラム研究は、H. J. Dyos. 『The Slums of Victrian London』 (Victorian Studies VI No 1 1967) を参照されたいが、なかでもわが国に大きな影響を与えたものとしては、キングスレーの衛生改革については良く知られているところである。その著作は数え切れぬほどというのは少し言葉がすぎると思うが、それ程数多くのスラムについての作品を残している。特に注目しておきたいのは、そのスラムへ慈善団体の働きとして良く訓練された婦人たちが、改良事業のため導入されたということではなかろうか。その他、E・チャドウィックについては例の有名な報告書 Chadwick 『Report on the Sanitary Condition of the Labouring Population』(1842) の著書である。しかもその『Commission on the State of Large Towns』(1844)が『The Journal of the Statistical Society of London』に掲載されたもので、その中にロンドンスラムのワースト・スラムについて興味のある記録が残されている。これは先に、つまり、1840年上の『Chadwick's Report』に基づき、さらにいくつかの専門別のコミッションが設けられた。中でも『The Health of Town Association』と『The Metropolitan Sanitary Commission』の活躍が目立つ、かなり詳細な貧民居住区の生態が明らかになり、特に例の fever-nests や cholera などの流行病の蔓延する地区の貧しい住民、労働者階級の生活の実態がようやく明らかにされる。

この他、つまり1880年代の前の時代は Simon Letheby, Buchanan, Evans や Liddle などが活躍する時代で、主として都市の不良住宅につき衛生問題を調査する視察官 (medical officer of health) らの一連の報告書が残されているが、彼らの年間(次)報告書に記録されたス

ラムの状態は、今日余り貴重な資料とはなり得ない欠陥を持っている。例えば A. S. Whol 'The Bitter cry of Out cost London part II pp 184-245 などを指摘できるが、総じて余りにもセンセーショナルな読みものの類で貧民窟の実態を知るのにはいささかの難色を示しているとさえ言われている。

やがて1840年代のメイヒュやチャドウィクに代表されるものへとつづく。

引き続き70年代にはオクタビア・ヒルに代表される博愛者による一連の事業が抬頭してくるが、これは俗に言う“concept of five-per-cent philanthropy”と称されるもので、それに基づいて貧民の生活向上を目標にした住宅改良事業である。そのO・ヒルの理想とするところは“desire to elevate the lives of the poor”であって、彼らの生活向上は、貧しく低い労働者階級を道徳的にかつ物理的に、高めていこうとした理想に基づいたものである。一、二文献をあげるならば

W. Hill,『Octavia Hill, Pioneer of the National Trust and Housing』(London, 1756) D. Owen,『English Philanthropy (1660-1960)』Cambridge (1964), などのその間の事情と彼女の社会問題とその改良事業の大綱を知る良書であろう。特に彼女の労働者階級に提供した数えきれぬ程のモデル住宅を、それに建築した会社は、我々の知るところで余りにも有名なエピソードを残している。今日我々が口にする“slum clearance”という言葉は、この彼女らのグループによって作られた造語で、労働者階級の住宅を準備するため、古い住宅をとりこわし、その後新しい住宅を建設するものであった。(参考書: John. English, Ruth, Madigan, Peter, Norman 『Slum Clearance』 London 1976) がこれを実際に実施して、数限りない改良住宅の道を備えた。

まず、手はじめに、リバプール (Liverpool) やバーミンガム (Birmingham) にそれを担当する当局をつくり、社会問題としての解決の為の策、つまり住宅改良について慎重な討論を繰り返して、当時の鉄道敷地事業と並んで、広範にわたるスラム・クリアランス、改良住宅の仕事をした。もち論これは、駅や鉄道敷地のためたち退きを余儀なくされたものではあるが、鉄道会社による住宅建設がすすめられたもので、その際の計画をこのコミティが担当した。尚、ここロンドンでも終着駅附近の立ちのきと同時に、労働者の住宅改良のための立法化を強力におしすすめた。ついに Metropolitan Board of Works は議会に Torreus が 1867・1877 法, Cross (1875, 1879法) を通過させるに至った。前者は主としてシングルハウスの提供を、さらに後者の立法化はそれを広範囲に適用したものだ。(この間の事情は G. Godwin 『Town Swampts and Social Bridges』(London 1859) を参照のこと。)

この後にスラムの報告書が1880年代以降の先きに挙げたもので、努めて当時の行政調査並びにジャーナリストらによってスラムの事情が一段と明らかにされるに至った。これらは皆、執筆を担当した者が直接スラムに出向いて、少くとも彼らと生活を共にして、出来る文真実を伝えようとしたものだからだ。特に当局の行政調査はより具体的に不良住宅の不衛生地区の事情

を改善するためのもので、その基礎調査を担当官を送って労働者階級の住宅事情とその問題を報告させた。この代表的な報告書の一つは、George Sims (Journalist) でユモアとパストとを用いてしたためた著書『How the Poor Live and Horrible London』London (1889) これであるが、これは例の『Bitter Cry of Outcast London』が出版される前、つまり1883年の初期に世にあらわれたものだ。これは主に、その住宅問題を社会問題として政治的解決を要するものであることを説いたものだ。そのタイトルには『Dante of the London Slums』としたものの、さらには『Royal Commission on the Housing of the Working Classes.』(1884—5) 危険と楽天主義の錯綜するスラム、これに対して道徳的憤り（義憤）実践的提案（示唆）をもって事を処することを説いている。筆者の思想では、この作品が先きの H. Mayhew のものよりも可成り詳細になっているところ、又きわめて同情的になっているところが読者をして親しく読ませるところではなからうか。また、グリーレウッド Green wood よりも記述が正確であること、さらにはよりピリッとさびのきいた点などが、また Lancet の作品よりも、よりあたたかさを感じるものがある。それは改良よりもより効果をねらったものとして秀れているように思える。しかも、彼のこの作品には新しいジャーナリズムのタイプを感じさせるものがある。つまり写真やセンセイショナルな表現法を豊富に駆使していること。ただ残念なことは不幸にもこのシムズの『Dante of the London Slums』の作品に当時のパーリアメント（議会）の議員が然程関心を示さなかったこと、あるいはまた彼の作品が広く人々の関心を喚起させなかったこと、その上とくに、金持連中の関心の的とならなかったことである。つまり要は貧民窟の改良事業への同情的な耳を持つ者を出すまでには至らなかったと言ってよい。

そのあとこのシムズに続くのが1883年の秋に世に現われた、一牧師の筆によった『Bitter Cry of Outcast London』だが、この匿名の小さなパンフレットが世の人々の関心を一気に集めることになる。これは単なるパイオニアではない。主題は同様ロンドンのスラムについての記述であるが、人々の心にセンセイショナルでしかもただ酔わせるのではなく、穏健でまじめなものを兼ね備えたものである。その人々の反応はスラムについて急に高まりを示したもので、“immense interest” “drew attention universally to” と受けとられ、すっかりスラムのとりこにしてしまったほどだ。いわんやこの他のきわみをつくしたホローさでしかもスリルに富んだ作風で人々の心を非常な勢いでつつんでしまった。

従ってまた、こうした作品を若い感受性の強いオックスホードの学生に報告を兼ねて、東ロンドンの実情を知らせただけに、異様な興奮が会場をみなぎり、その中で集会がすすめられたことは容易に想像できるかと思う。集会が進むにつれてバーネットの目には確かな学生達の反応が、しかもこの彼の地区での事情を知れば知るほど、彼らは大きなショックに見舞われていたことは事実だ。終いに彼らの多くがキャノン・バーネットらと共にこのセツルメント事業にたずさわり、さらにロンドンの貧困について知り、その策としての貧民への社会福祉を準備することに賛意を示し、協力する決意を固めるに至った。

この会の最後にバーネットが声をはり上げて切々と学生達を前にして説いたことは、「これまでいく度も東ロンドンについて、そのホローや恐怖を説かれてきた。ところが説明する者が余りにも東ロンドンについて、しかも貧しい住民（労働者階級）達の悲惨な生活についてほとんどわかっていない。つまり無知であるか、又誤った理解をしていることが余りにも多い」と指摘した。さらに、従って西ロンドンの何も知らない一般の住民達がそれを鵜呑みにしてしまつて「無知が無知を呼ぶことが恐いのだ」とも説いた。つまり、まずその弊害をさけるのに最も有力なものは入植により、事実を硬めることと、その結果ウエスト・ロンドンの無知とを知らしめることで、そのために若い情熱家のボランティアが必要であること、また直接東ロンドンの住民たちへ知識を供給することの必要を力説して止まなかつたところだ。

ところでバーネットの言う知識の供給だが彼はそれを三つほど挙げている。即ち(一) 日常の実際の生活を見、それに基く知識であること。(二) 喜んで労働者階級と一緒に生活でき、心から彼らの貧しさに対して同情できる知識であること。さらには、(三) 広い人類愛からほとばしるような悲しみから出るそれであること…を挙げた。しかも、それらの知識に基いて、それを蒐集する方法は「貧しい人々の中に一緒に住むこと」しかも彼らの中にあって異物ではなく「良き隣人」として生活を共にすることである。しかもこれを通じて得た知識こそが真の改良事業に必要な条件となることを説き、そうして東ロンドンに拡散しつつあった貧困の情報を集め、労働者階級のものの考え方、人生感なり哲学、さまざまな必要、動機、心情といった一済の情報を集めることを大きな役割であることを、知識の蒐集の方法として提示した。

ただ一言申しそえておくならば、ただにバーネット一人がこの情報の蒐集の必要を感じていたのではない。例えば G. K. チェスターター (Chesterton), ビートライス・ウップをはじめ80年代の社会主義者たちの中には、未だ東ロンドンに入植した経験さえ持っていなかったものが多勢で、例えば W. モリス (William Morris) にしてもトインビー・ホールの開所式の当日、はじめて東ロンドンの住民たちと面と向かったという有様だっただけに、真実な知識を提供しうるものとして耐えるものではなかったと言ってもよからう。唯、先の B・ウエップにしてもようやく労働者の中に入って社会調査をはじめたところであつた。モリスにしてみればようやく1885年5月、『A Preaching Stepney Way』なる小冊子のなかで、「未だかつて東ロンドンの住人に直接ふれたこともなかった…」と。そうして彼自らが「諸君自らがここに来て、この偉大なものすごい階級のいることを感じてほしい…」と、しかも「彼らの底なし沼のごとき生活を見てほしい」とまでつけ加えている。しかも彼らとの間に人工的な隔絶 (artificial isolation) をつくり、また彼らもそれに倍した西ロンドンへの偏見を持っていることを指摘した。多少蛇足になるが、その解決策として「来たりてこの人々を見よ、しかして彼らと真実に接せよ」処方箋を出したところ、その後のモリスの社会主義を理解するのに大いに手助けとなるであろう。

さらにもう一人、社会主義者の中で C.R. アンビー (C. R. Ashbee) を挙げることができると思うが、彼がはじめて「イングリッシュ・セツルメント」即ち「トインビー・ホール」を訪

ねるのが1886年6月、開所以来一年半も経たときであるが、数カ月間トインビー・ホールのレジデントとして以来20年近く入植することになる。彼の目的のなかにはこのホールでの印象を次のようにしたためているところが興味のあるところだ。“the East of London had a thrill for me!”として、「この東ロンドンの住民に必要なものは人間性を持って接することだとか、他の者は金や衣料の施与することだとか言うが、私はこれには人が必要だということがようやくにしてわかりはじめて来た…」と。

ユニバーシティ・セツルメントの第二の目的を知るには、ケンブリッジ大学での報告会(Cambridge Review より)でのバーネットの主張の中にあると思う。

初期のセツルメントの指導者、ときには創始者とも評³³⁾されるエドワード・デニスン(Edward Denison 1840-1870)³⁴⁾³⁵⁾たちが東部ロンドンに居住する貧しい労働者階級について、正しい理解をもち得た事はすでに述べたところだが、いかにせん、それを理解するということの困難さを感じずにはいられなかったであろう。何故ならば、労働者たちの物の考え方なり、生活態度なりを理解しようとした気持ちは判るが、他方それを理解するには、あまりにも限界のあることを忘れてはいられない。従って、彼らは東部ロンドンの住人に対して無知であったことが、結果は無差別にものを施してしまったという悪弊を自ら刈り取らねばならないはめになってしまったことだ。

そこで、こうした彼来の救貧法による施与や個別的な慈善行為を改めて、システマティックな改善の余地のあることを認め、その具体的な策として、先に、オックスホード大学のセント・ジョン・カレッジにて、第一のセツルメントの役割を若人に力説して、彼らの社会的サーバントとしての使命を応えるよう要請をしたのであった。続いて、このケンブリッジにおける報告会に於ては更に問題を展開して従来の伝統であったキリスト教のミッション事業、伝道所が実施していたものとセツルメントが内容を異にしていることを説いたものだ。

まず開口一番バーネットは、セツルメントとミッションとの違いを指摘しているが、むしろこれは、セツルメントを定義付けたものと言えよう。即ち「生活の必要を欠くような未熟労働者にある強力な自覚を促すことに、このセツルメント事業の意義がある」と、では何を自覚させるのかについて続けて曰く、“feeling of self-respect”つまり「自己自重のおもい」と直訳するが、自分を大事にする、そうした感覚に目醒めさせるということだ。

ここでバーネットが力説したミッションとの相異について若干述べるが、この固執するところは『Toward Social Reform』³⁶⁾として世に表われたが、ここに明らかにされている。但し全く趣を異にしているのではないことは彼のことはから判る。即ち、「人類社会の福祉に貢献するという点、つまり目的においてはむしろ一致している。だが、本質的に異なるところは、むしろ、その思想と組織、また方法に於いてだ…」と。具体的には次に示すところだが、彼はこう言っており、「布教所(ミッション)の目的は、罪人の自覚に至り、神に帰依することの

くい改めにあるのに対して、セツルメントのそれは、相互の理解、つまり人間的接触による個人的な感化（ヒューマン・インフルエンス）であることを説いた。

ところで、何故こうした区分をバーネットが改めてセツルメントでは必要としたのだろうか。彼はケンブリッジの報告会の際、セツルメントを担うレジデントの資格とその役割を説いて、“most important respect”（もっとも重要な自野）としてその資格を幅広い経験を積んだ宗教家であること、同時に幅広い政治的・ポリティカルな信念を持った者であること…などを求めた。しかも更に伝道師、もしくは布教師となることを続けて求めているところだ。つまり労働者階級の人々に思いきった生活態度の変化を可能にできる人々だということを信念として持っていることを、そのセツルメントのレジデントの要件としたことだ。つまり、人間を信じて、いかなる人間にも潜んでいる力を自らの力によって、レジデントとの接触を介して彼らの中にある“feeling of self-respect”また自らのものとして受け取り、これを培養して生活の向上を目指すという。つまりは、意志の力を強めるための積極的なセツルメントの布教に献身する者であること…としたことから然程ミッション事業とセツルメントのそれとは相違がないようにも受けとれる…事実、このイングリッシュ・セツルメント研究者、ウェルナー・ピピト『Toynbee Hall. English Settlement』London (1914) がその著書（4頁）の中で述べている如く、「その事業のはじめにはさしてミッション事業とセツルメントのそれとは立場の相違こそあれ、ほとんど変わらず…」と解し、「10年後」つまり新しい世紀には、「その相違が見られなくなってしまった」、但し、重要なことは、始めの違いの問題であった、何故ならば時代と共にピピトが言究した如く、ミッションの側に大きな変化がきて、セツルメント事業に接近するための大きな変革を伴ったからだと解せるし、歴史的事業からするならば、このミッションからセツルメントに旗がえしたものが決して少なくないからだ、だとするならば筆者はこの違いこそセツルメントをしてセツルメントたらしめる本質と受けとれる。何故ならばセツルメントは人の制度であり人間のなすものであっても不完全なもの、不均衡なもので常に改良、改善されながらもひとつのモデル（示しうるもの）としての社会的役割を担うところに、その使命があるように思うからだ。こうして見るとき、先にこの違いこそセツルメントたらしめたものであったろうし、またセツルメントのもつ思想なり、方法なりが真理であったことを雄弁に物語っているものと思う。大林宗嗣はその『セツルメント研究』（1926）の207頁に「従って布教所は次第にその仕事の範囲を拡張してセツルメントがなした交友、遊戯、娯楽、教育というが如き方面に進んでいった…」を述べミッションのセツルメントとの違いのなくなりつつあったことを指摘している。

もう一つこれについてニューヨーク・セツルメント・アソシエーション系のセツルメント館、M. K. Shumkowichits の俗に言う『セツルメント問答』なるものがあるが、参考にされれば更に、この違いについて明確になろうと思う。（大林宗嗣・セツルメント研究、東京同人社・1926参照のこと）要約すれば彼女の双方の違いは、ミッションの宣教（布教）機関であるの

に対して、セツルメントのそれは、家族 (family)³⁷⁾³⁸⁾としたところだ。その一つは、(It's family living in a neighbourhood) から判るように、近隣の労働者家族と共に住む入植、一団の家族を意味する。しかも、その一団の家族は、家族員各々が文化、レジャーを特徴として持ったそれであること。したがってその文化、レジャーの利益にあずかることのなかった労働者家族にそれを供給するものだ。また近隣の隣人たちと協力して「良き隣人」の運動を展開して、彼らのうちに、モデルとなった家族のメンバーが持つ利益、更にここでは、自ら生活の向上に目を向け、それに意志の力を働かせ得るよう、共に助力することである。ひいては社会問題を共に解決する方向だと説いている。

大林はその決裁に多少の難色を示しているが（同指書 235 頁）筆者は、むしろ「イングリッシュ・セツルメント」の米国に渡り、そこでの新しい開花と解釈する。むしろ、この一度外国にスライドしたセツルメント事業の中に見事に析出した再結晶として見るのだが、先のシムコウィッチ夫人の『セツルメント問答』の家族の説明の中で筆者が――を引いた箇所は「セツルメント」の多様な定義を意味したものとして、先きの大林の『セツルメント研究』を紹介したが、その13頁に、セツルメントの一般的な解義として「解決」「植民」「決着」などを挙げ、特殊な解義としては「支払い」「決算」更には「授産」ないし「遺産」などに用いられていることを指摘したが、これが示す如く多彩な役割を担ってこそ「序」で述べた如く、トインビー・ホールの説明に四苦八苦していることを述べたとおりで、やや「アレ」も「コレ」もの感がないでもないが、それだけ焦点がぼけているかの如く理解されないでもない。またここが、ミッションのキリスト教の布教所が“光”として人目につき易いのに対して、セツルメントのそれは、むしろバーネットの性格にも似たものかどうかさだかではないが、余り目立たないところにこの特徴があるようにも思えてならない。

話の筋みちをケンブリッジ大学での報告に戻そう。つまりセツルメント（彼の主張し若い大学生に呼びかけている）は、思想、実践、方法に於いて一線を画していることを強調したところで、矛盾なくミッションナリーとセツルメント・レジデントの融合が成り立つことを述べている。したがって貧しい労働者階級の者たちのパンや住宅の求めに対してそれらを施すものではなく、より良き高尚な思想を提供するところに、そのワーカーの役割があった。しかもそうした高尚な思想にうらうちされた援助としてパンや住宅にかえて地区にボーイ・クラブなどの組織の手伝いをしたり、高い標準の生活をセットしたり、人間として尊厳や自覚を与えたり、彼らとの間に友情をつくるために専ら精神的なサービスに限ったことから容易に判るように、単に、ものの施与をこえて、彼らの意志の力を自ら発見できるような機会を提供するところに、そのセツルメント・ワーカーの特質が生かされる、そうした高尚な目標を持った者であることををる説明した。

したがってまた、これは単に他人つまり、そうした高尚な利益、即ち文化、レジャーなどを持ち得なかった貧しい労働者階級にその道を示すのみではなく、ワーカー、つまりレジデント

自らが、きびしく自己を批判するものであることをも内含んでいる。むしろ、このきびしさも自己への洞察があったればこそ、強いて言うならば、この自覚に立ち尚、力弱き者として絶対者の前に立つという生活の態度が培かれた文化、あるいは耕やされた土壌と言えるのかも知れない。この時、初めて貧しい労働者階級へのモデルとして、“habits of cleanliness, order thoughts of righteousness and peace”と言わしめたバーネットのセツルメントが運動を通じて実現化することになり、わけでも、その高尚なバーネットのセツルメントの担い手としての、単なる「レッセ・フェール (laissez-faire)」としての有閑階級の要因ではなく優れて人間そのものの友情に貢献しようとするものだ。何故ならば、当時の貧しい労働者階級の人々の持つ文化は文明化されておらなかったことを持ってきての特徴とすることができる。つまり彼らが未文明なのは、即ち文明とは全く縁もゆかりもなかったからだ。残念ながら彼らの親の代からそれはなかったと言っていい、それ故彼らは残忍な性格でしかも犯行的で不道德なルンペン・プロレタリアートを身につけてしまったと言える。つまりは文明化の機会を待ち得なかったことを意味しており、そうしたものが、非文明化が世代から世代へと、うけ継がれ決して文明にあずかることはなかった。ここをバーネットのそこでの報告会の印象から労働者階級の文化的特色を要約している。P.L. ゲル (P. L. Gell) しかして先にバーネットの言述したミッションとの違いを越えてミッションナリーであることのセツルメントのレジデントの役割を述べている。しかも、その担い手として彼らは東部ロンドンに入植し、この地区の牧界人 (clergy) とした教区の仕事を補足する者であることを説いている。しかも換言すれば、1812年には、それは文明化の前哨 (“the outposts of civilization”) となることで繰りかえし繰りかえし述べている。この仕事のために若い青年たちの協力と入植を喚起させたのである。

最後にアベル教授のことばを引いて結ぶことになるが、彼女はこの初期のセツルメントの担い手レジデントたちは三つの役割を同時に担ったことを指摘している。つまり missionaries explores, district officers であり、ロンドンの暗黒地帯に光をかかげる者として、それが三位一体として光り輝やくことをこのケンブリッジでの報告会で明らかにしたものと言えよう。

(三) (6) ユニバーシティ・セツルメントでの第三の目的

これはユニバーシティ・セツルメントをしてもっとも重要な目的の一つでありかつまた「ユニバーシティ・セツルメント」の特徴を示したものであると言える。一言にて言うなればそれは貧しい労働者階級とのミゾをうめるフレンドシップにあると言っていい。当時のこの階級は19世紀イングランドからの疎外態として捉えることができるほどで従ってまた「序」に述べた如く、この間には貧富の差が著しく開いていたことを物語るとのことである。とくにこうした労働者階級が社会問題に至るのは、その産業革命に伴って増加し、深刻化したもので、とくにマス・ソサエティの社会現象として産業化あるいはまた「都市化」社会のアトム化 (atomization) としてこれを促してることができよう。

バーネットの報告会でのそれによると、東ロンドンを説明して、(1) 広範な非人格地帯 (impersonal area) であること、(2) ここに居住する住人たちには人間関係 (relationships) などなく、それをあえて持たない地区で anomalous area であること、(3) 問題解決になんら関心を示さない無関心指向、さらに、(4) 自己の居住する地域への所属感喪失、したがってまた約束に対する忠実 (loyalty) や愛慕 (attachment) など持っていないことになり、つまりコミュニティの喪失などなど列挙した。事実この地区の住民間にはそれを結合させる強いじん帯がなかったことは、アルベの研究によりはっきりしている。

また労働者階級といっても短期間ここに居住するものから長期に亘ってここに住みついている労働者があり、未熟練労働者があり、熟練工 (労働者) もそこには混合しており、他の多くの産業不備軍としてここに集中していた。その他ここに集ってきた移民がある。例えばその一つは英国の貧しい農村部からのもの、さらには国外からの者、とくにこの当時は東ヨーロッパからユダヤ人の移民が著しく目立った時期である。したがってまた、ことばや生活集団を異にした労働者、多種多言語の混合など、階級、階層等々が複雑にいり混った特殊な社会構造をもっていたといつて良い。またその人口の流動性があまりにも激しかったことが指摘できる。

当時の事情は、初代トインビー・ホールのレジデントであった W. リウンリースミス (W. Llewellyn Smith) が C. ブーツ (Charles Booth) のホワイトチャペル調査に協力するが、彼の報告からも判かるようにすでに東ロンドンの住民の4分の1は俗にいう“流れ者”と称するロンドン以外の地から移住してきた者であったことが報告されていることだ。さらに前に述べた如く、この東西の物理的な境界がすでに19世紀のはじめには西と東の一層はっきりした一線が人々の心の中に画かれていたがこれをさらに追いうちをかけたように貧困の群が集まりはじめてきた。例えばその一つ “a largely poverty-stricken area” とか “slum” ということばでそれを表現し、「私たち」「あの人たち」との間には起えることのできない心理的な境界とその意識とが表面化していった。引きつづき19世紀のはじめには、ドックの開発が盛んに行なわれるようになり、これと相俟って当時の空地がまたたく間にここで働く未熟練労働者のためのブロック仮り小屋 (住宅) がつくられた。その他人口の社会増を考える場合、商人や手工業者たちがとくに東ロンドンに集中したことも見逃がすことは出来ないし、またこのスラムが外国からの移住民にとっても英国の都市生活の生活様式を身につける場であったし、またこの過程をマスターすると他に職や家を求めて移動するといった具合でその流動性のはげしさもまた特徴の一つである。

すでにバーネットらがはじめてホワイトチャペルに移り住むよえになった当時 (1872) 完全に労働者の町になってしまっていたし、そこには “leisured and cultured classes” 層のものが全くといって良い程いなくなってしまうていた。したがってまたバーネット牧師がもっとも恐れていたのは、この急激な産業化、都市化それにドック建設が社会構造を大きく変えてゆくことでさしずめこの群がり集まる貧困者は豊かな道徳的リーダーシップを喪失させてしまうこ

とであった。また同時にバーネット牧師は上流階級のヒューマニティやシンパシー (humanity, sympathy ; (同情, 同感)) の喪失を非常な気持ちでながめ、それをまたうれいていたことが判かる。そうして終りにはその双方の間に理解しうるきづなとも言えるものがなく、ただ差の意識であったり、差の高さ低さであったりして、ここにまさに手のほどこしようのない階級意識としての敵意さえ生ずることに気付く策を考えた。そこで、これを救うるのは唯一。産業化の余り進行していない農村の人間と人間との関係をもモラルにしてその調整の具体策を講じることだと考えた。そこで彼はまずはじめに彼らのために住宅を提供することで、これは決して雲をつかむような実現不可能なものではなく、むしろこのための組織づくりが先決であることの確信を得た。そこでセツルメントは労働者が自由につかえる大きな建物が必要なことに付き、そこで彼らに良い文化やレジャーを示すことが出来ると考えた。しかもこの個人的なサービスを準備することは強いては無人権化からくるホローをなくし、新しい地縁コミュニティ意識を作るのに最高であったという結論に達した。したがってこの点をとくに強調したのがオックスホードのセント・ジョン・カレッジでの報告会である。彼はセツルメントの先駆者 E. デニソン (Edward Denison) を例にひき彼のステップニー⁴⁹ 番地 ピルポット通り (Philpot Street : ロンドン病院の裏通り) での入植と、ドック労働者への聖書研究や聖書講義、地区の小学校の代用教育を兼ねて地区の救貧委員の支援金の受け渡しとして働く。ここでのこの経験は後に受給の無差別による弊害『The Terrible Effect of Indiscriminate Almsgiving』なる一書をしたためることになる。しかも同書にはその改良、改善についての意見書がついており、早急にその改良にのりだすことを提案したもので、その担い手となる。C・O・Sの設立を提案しているところが実に興味あるところだ。しかも彼は次のような結論を考えていた。即ち東ロンドンにおけるレジャークラスのメンバーとして、その個人的な感化の必要を説き、これを以ってデニソンの役割とした点で、これが初期の「イングリッシュ・セツルメント」に生かす主旨のことを説明した。

再びくりかえすまでもなく、このデニソンのステップニーでの入植とその経験から、先きに述べた如くセツルメントの任務とするところは、まず貧民との親密な接触である。で、この彼らとの生活の体験を通じて従来の救貧法による事業や各種の慈善団体が施してきたものがいかに無用なるもの、むしろことばを換えるならば有害だともいう。しかるにそれに代わるものとしてデニソンはここでセツルメントの確固とした精神を示すのであるが、こんな風にも言う。即ち「彼らを救う唯一の途は物の施こしではない。むしろその自活の途 (feeling of self-respect) の機会を与えることだということを知った…」と、また1867年12月クリスマス日記には「ただ金を与えるだけでは何ら、彼らには悪弊こそあれ決して利益になることはない…」と、またむしろその行為こそ彼らを怠慢に落とし入れてしまうこと…。また貧民に対する身体的な援助もこれと同様だという。結局のところは自分でやることで、またその意志を働かせるようにすることだ…とつくづく考えるようになった」と (59頁)。そもそもセツルメン

トの前身「ユニバーシティ・エクステンション」なるものがあらわれるのは先きに示したE・デニソンと無関係ではない。1867年8月、東ロンドンへのセツルメント入植という点ではもっとも早くむしろセツルメントの創始者として記憶されるべき人物であろう。この彼の経験は1869年彼のもっとも感化のうまかったデンマークヒルのJ・ラスキンの家でのある会合が持たれた時のことだが、集まった面々の中にはラスキンをはじめデニソン、J・R・グリーン、それにB・ランバートらであった。デニソンは承知と思うが歴史家だし、あとの残りの二人つまりグリーンはステップニーの一教会の司祭、それにもう一人B・ランバートはバーネットの友人でホワイトチャペルの一教会の司祭であった。しかも彼らがここに集まった理由は他でもない、ステップニー地区の貧民のための新しい援助計画を話し合うためであった。

この寄り合いについては前にあげた大林の著書『セツルメント研究』の106頁以降に記されており、あえてこれ以上深入りはしないが、そこはこれに参加したB・ランバートが1884年9月トインビー・ホールの開幕直前にあらわした『Contemporary Review』によるものである。

このときデニソンとグリーンとがそれに答えて、すでにステップニーでの実験づみの入植つまりセツルメントを東ロンドンに設けることを提案した。しかも、その担い手は大学人によるものそれ（援助活動）であることだった。

おそらくここでの会合の結果はB・ランバートから直接バーネットが聞いていたと思えるのだが、なぜならばオックスホードでの報告会でのバーネットの説明の中にはっきりと博愛主義的な諸々の活動にボランティアが必要であること、そのための組織を述べていることから容易に想像がつくことである。

ところで、これらの一連のオックスホードでの報告会から数人の若人たちがバーネットの呼びかけにこたえるのだが、何をおいてもまず、当時オックスホード、バリリオル・カレッジのチューターしかも思想家でもあったT・H・グリーン (T. H. Green. 1836-82) の目にとまったことを記さねばなるまい。彼はバーネット牧師のセツルメント・アイディアやそのセツルメント計画に深い関心を示した。とくに彼の社会思想 *personal service = civic activities* 理論はそれを可能にする機会がバーネットによって開かれたと言っても良い。他方運動の推進者バーネット牧師にとってはこのT・H・グリーン³⁹⁾の哲学が *citizen* (良民) と *social reform* (社会改革) にもとづいたものであり、セツルメント事業を強力にすすめる基本理論となっていることであった。以来バーネットは彼の哲学と *civil activities* をセツルメントのレジデントの一つのモデルとして大いに影響をうけたところのものとなり、強力な援助者が加ったことを喜んだ。しかも彼のこの *civil* と *personal services* の理論と実践は北部(オックスホード)の行政に応用し、そのための教育拡散のためのキャンペーンをも試みたほどのもので、十分に実践に耐えることは立証ずみのことであった。

もう少しT・H・グリーンについて申しそえておこう。彼がオックスホードはつの評議会員 (*town council*) の「ドン：(英国大学での称号)」に選ばれる、これはとくに特別大学のメンバ

ーとしてではなく、むしろごく一般の住人の立場の意見をきくために選ばれ国家の援助による小学義務教育の設立のため活躍をする。もちろん「Tountan Commission」のメンバーとして（またのちには「National Education League」）の働きを支援することになる。しかもこの働きがバリリオル・カレッジの学生たちに強力な印象を与えることになる。M.リヒター(Melvin Richter)の自伝からグリーン牧師、伝導師に対するものでそのアピールを要約すると凡そ次のようなものとなる。つまり牧師や伝導師の義務感や使命感を強調したもので、ヴィクトリア社会の教会のもつ信仰的たいはいもしくは脱落さをするどくえぐったものだ、しかもそれをいかに解消するか、さし当っての当面の問題であった。つまりその策として彼は衰微せる信仰を即、罪意識とし、しかもこれは社会での不正行為と同様なものとしてそれを転換もしくは止揚すること。また、その方法としては個人的サービスへと (personal service) 交換する理論を説いたものだ。これが後にB・ウェップらによって指摘されたところの知識階級、富者の“new consciousness of sin”⁴⁰⁾⁴¹⁾である。即ちデニソン曰く、この罪意識はつねに personal service を伴うものであり、告白や献身を引き出すこと、さらに社会改良への (reorganisation of society) 力を伴うものだと言った。

バーネット牧師のこのオックスホード、セント・ジョン・カレッジでの講演は、彼の聴衆に向ってデニソンのこの点、つまり“知識階級の罪意識”につき説きあわせて人の本務（義務）と献身（社会奉仕）を訴えたものといつてよい。

次いで、これから挙げる人物もイングリッシュ・セツルメントを語るときに忘れてはならないものの一人である。その人こそ若くしてセツルメントに殉教したとまで言われるアーノルド・トインビー(Arnold Toynbee(1852—1883/4))⁴²⁾⁴³⁾である。彼については大林の同掲書25～31に紹介されているので重複をさけるが、唯二、三筆者が学び得たところを要約して列記しておきたい。彼は先きに述べた通り、バリリオル・カレッジのチューターT・H・グリーンが無二の親友であること、とくに、グリーンという宗教とか社会問題に変換するパーソナル・サービス理論に深い感銘を受けた。したがってまたこのトインビーのその後の活動にはこのグリーンの社会理論によるところが大であったことはあえて論をまつまでもない。

1873年、オックスホードの Pembroke College で宗教学を修め、1878年にはこのバリリオル・カレッジのチューターとして約束されるに至った。ここで経済学や社会の様々な問題について興味をもつことになる。同時に先きのグリーンとの交友により宗教（信仰）と社会問題について、足がかりとしてまず教会の改革にのり出すことになる。そのためオックスホードの教会改革委員会 (Council of the Church Reform) のメンバーになりその組織づくりに着手した。一方、この間ホワイトチャペルのセント・ユダ教会のバーネット牧師の間に手紙の往復がある。とくに挙げておきたいのは1879年2月18日付のもので、トインビーがバーネット宛に出した書簡の中には彼が組織づくりを急いでいる一団はまぎれもなくトインビー・ホールを予表しているかのようである。

80年代の初期にはバーネットのいうセツルメント事業として北部イングランドからロンドンではつの大学延長講義で経済学などを労働者階級に講じたり、オックスホードでは消費組合協会を組織してこれを助け救貧院委員をつとめるかたわら、良き住宅のキャンペーン、オープンスペース、自由につかえる無料の図書館づくり、さらには著述などに費やした。とくに我々の記憶に残るのはロンドン労働者町ニューマンストリートにあるセント・アンドリュース教会にて情熱的に講義をつづけたがそれがもとで著しく健康を害しやむなく故郷のウインブルドン帰るがために甲斐なく31才の若さでこの世を去ることになる。この間、彼は「セイント」(Saint) : (聖者) とか「アスポトル (apostle)」(キリストの弟子) とか人々から呼ばれた。それは、その人柄の感化の偉大さを物語っているとおもう、それだけ彼セツルメントの強力なけい引の一つを失なったことになる。東部ロンドンへの入植も経験している。即ち3年前すでにオックスホードの大学の休暇を利用して東ロンドンのステップニーはホワイトチャペル・セント・ユダ教会の近くに入植して「慈善協会」貧民窟訪問委員として働いた経験をもち、さらに同地区の「Tower Hamlets Radical Club」とも関係をもち会員として活動するが同会が彼の信奉する宗教とは全く別な団体であったところからこの会を去っている。

くり返すことをさけるが彼ののこしたこうした業績を並べただけでも、それは初期の「イングリッシュ・セツルメント」を代表するに値いするほどトインビー・ホールの仕事に寸分のちがひもなかったほどで、いかに大きな礎石となったかを理解しようと思う。

総じて彼のこうした活動の動機を評してウェッブ夫人は“consciousness of sin”であり、またその彼の師バリリオルの学長チョウェットをして評価せしめた「予言者、殉教的性格」はオックスホードの「トインビー・サークル」に大きな影響を与え、その中からその後いく人もの社会サービスのためのサーバントとして彼の後を継ぐことになった。また彼の社会的平等なる思想は唯セツルメント事業に携わる者だけでなく広く知識階級の資本家(財産家)たちに反省の機会を与えた。その中から強力に彼のおしえに準拠しすんで共働者となった者たちがいる。例えば B キング(Bolton King) などがそれだ。今少しく説明するととくにトインビー・ホールの建築には彼の援助が大きな働きをしたものだが、もち論物質的援助はもとより彼はこの日のために数多く同信の徒を集め、トインビーにならってあらゆる種の社会サービスのサーバントとしての経験をつむためワークハウスを訪れたり慈善団体を組織したり、小学校の教師たちにプログラムを備えたりして彼らをよく訓練しよく教育をほどこしトインビー・ホールのレジデントらを準備した。

また話しをT・H・グリーンにもどそう。彼の人格的、思想的影響について述べているところだがアーノルド・トインビーをはじめ Philip Lyttelton, Gell, F. Alfred Milner などの最初トインビー・ホールのレジデントたちを教育感化した。ゲルはグリーン、アーノルドとともにオックスホードでの初期の強力なセツルメント運動の推進者でありかつまた擁護者であり東ロンドンのセツルメント、即ちトインビー・ホールの初期のレジデントでもあった。また同ホール

の評議委員会の議長をも1884年から96年まで歴任した者でもある。またミレナーはホワイトチャペル地区の University Extension Society : 大学拡張運動協会（これは S・バーネットによってつくられた組織で後にはトインビー・ホールの下部機関となる）のセクレタリーを歴任、この間トインビーの開設の年は同協会の本部 (London Committee) のメンバーとしてバーネットのセツルメント建設に協力する数年間ここで労働者階級にユニバーシティ・エクステンションの講義をし、1912年 London Committee を引退した以後はトインビー・ホール評議会の議長を続けることになる。

こうして「イングリッシュ・セツルメント」の前史は盛んな社会サービスを志す情熱家らの手によって途が徐々に準備されていった。まさに時期到来、見事な花を開かせたのは他でもない。先きにのべたアーノルド・トインビーの死でありグリーン・デニスらのセツルメントに先駆者たちの突然の死であった。朋友たちを象なったバーネットは大きな失望の中にも、また喜びと希望をもって両大学への報告会を続けていった。

トインビー・ホール開設をまえにして、この運動の推進の過程でもう一つ二つ述べておきたいことがある。むしろ同ホールの組織や建設は資金面に関する事物も少々ふれておこう。

トインビー・ホール開始の1884年のバリリオル・カレッジにて会合をもつ、この会合はセツルメントの期が熟し、いよいよその館の建設組織について具体的なことを協議をするものであった。まず正式にコミティをつくり、このコミティに選ばれたレジデントらの結果をとりつけること、さらには労働者階級への快適な住宅をつくるための設計などを協議し、同席上同コミティは幾人かパイロットとしてロンドンに送り、入植を試みることを提案した。おり良く産業学校(industrial school) が空いており、これをセツルメントの本拠地としてとりあえず出発することになった。しかもこの館のディレクターにバーネットを同コミティはおし、ひきつづき2月29日のオックスホードの定例会では、二つの提案を決定。この一つはセツルメントを推進させるためのロンドンでのセツルメント協会を設立すること、第二は館長をおき、これに年間250ポンドをつけること等々を決定した。同委員会は館長に S・バーネットを決定同時に資金募集のためのコミティがつくられバーネットや先きのボルトン・キングがケンブリッジ大学の会合に赴きこのセツルメントの計画について詳細な説明をする。会合はケンブリッジコミティをつくり社会問題の研究をつづけることを提案し可決される。尚会の後、S・ゲルによりセツルメントの前段階として、オックスホードのコミティが採用した協会の決定とロンドンへの入植を述べ、これに協力する旨を提案し決定された5月24日の定例会にて会員全員の同意を得それに協力することを可決した。こうして強力なセツルメント推進の母体組織が出来上っていった。

こうして、両大学の支援を得てついに1884年11月の末東ロンドンにおけるはつの「イングリッシュ・セツルメント」(ユニバーシティ・セツルメント)の幕開け、Toynbee Hall, Universities Settlement in the East つまり、トインビー・ホールの誕生と相成ったわけである。

早速、『The Oxford Magazine』はその1883.12.21日付けの記事にこれを取り上げ、この東ロンドンにおける新計画は「今日もっとも希望のもてる実験であり、しかもきわめて有益なる試行の一つとなるのである……」と報じた。またこの新しい計画について William Morris もその同じ週にオックスホードで講演しているが「中世の演技から抜けだしたT・H・グリーンや殉死したアーノルド・トインビーらを中心とする“Re-renaissance, new faith”である」…と、また2年後の『The Oxford Magazine』には「3カ年を経過したが（石の上にも3年）これはきわめて重要な運動と言える。しかも今日では疑いもなくこのオックスホードと東ロンドンとを結びつけた橋だと言っても過言ではない…」云々と。

こうして両大学の機関紙『The Oxford Magazine』と『Cambridge Review』が引き続きセツルメントを支持し、ことの次第を詳細に報じてくれるばかりか新しいボランティアのアピールなどにもそのスペースをさいて協力をおしなかった。

トインビー・ホールの年会報告は引き続き両大学で行われたが、その一つ、1892年のそれを参考に記述してみよう。

館長（バーネット）はじめ、学生、レジデントはもとより、これに関心のある政治家、社会主義者、それに労働者の代表たちが集まった。この集会に集まった人の数は600とも700とも言われるが、会場に当てられた Balliol Hall がまさに ‘crammed full’ と評される程の盛況ぶりであった。さらにこの会の模様については後程ふれることがあろうと思うが、白熱し、議論フンブン、それに対するヤジ、多少議事進行上細々としたトラブルでハプニングが起り、一時騒然となり進行をあやうんだほどだった。この経験は後のミーティングに特に報告を制限して、小さな集会で済むよう配慮がなされた。それでも、学生だけでも200を下るということはなかったという。時代が変わり1900年の年会では凡そ初回の6分の1ないし少なく見積っても10分の1の50ないし100人程度となってしまった。だが『Oxford Magazine』の報道によると「会場に当てられた所には会衆が満席の状態で、特にセツルメントに関心をもった新進気鋭なしかも熱情家たちが集まり盛んに論議した」と、さらに1908年2月の例会ではオックスホードのバリリオ・カレッジの裏にあるセント・ジョンズ・カレッジで開かれたが、このときも空席がなほ人々が集まり熱心に報告と年会が進められた…と記されている。

とくにこのオックスホードでの協力が目立って良く、年会などは多くの人々を集めた。その協力者の中には、Edward Caine, A. L. Smith, William Markby, W. H. Forbes それに Sidney Ball の名が連らねられているが、とくに最後に挙げたバルの如きは、トインビー・ホールを強力に支持するためのオックスホード側の組織づくりに取り組んだ者で「イングリッシュ・セツルメント」の先駆者T・H・グリーンやアーノルド・トインビーなどの影響をもっとも強くうけた者といっていいであろう。同時に彼は80年代オックスホードでは最も秀れた「Fabian Socialism」の指導者の一人で、特にT・H・グリーンやA・トインビーのなき後は、バーネットのこのトインビー・ホールに関心を示し、殊のほか労働者らに開かれたユニバーシティ・エッ

クステンションに心ひかれ、その協力をおしなかった。尚、「ラスキン・カレッジ」の評議員会のメンバーともなりオックスホードにおける「労働大学」を開設し、大いに労働者の教育に奮起し、ついに「Worker's Educational Association」なる協会を設立してこの方面の事業に貢献をした人物でもある。

これらセツルメントの重要な人材を析出したオックスホード大学をバーネットはこよなく愛しつづけた。そのことが数回にわたる実弟への手紙の中で発見出来る。まずは1884年には「Oxford is lovely…」, また1886年6月26日にはとくにT・H・グリーンやA・トインビーらを回顧して、「The Balliol boys were bet」さらに1889年6月22日付の手紙には「At present Balliol is top, more honest work, more humility, Xore religion in it than other college」

とまで。また彼のいとこにしたためた手紙の中には、
「Oxford has a great charm in its society of people who are cultured and not rich !」
(ここオックスホードにはさりとて富者ではないが十分に教養された人格と、それに見合った教養(文化人)を持った人々が少なからずいることは実に強力で素晴らしいものだ)…と。

その後もこのこよなく愛したオックスホードにバーネットはオックスホードの「正式講演者」として選ばれ、しばしば大学を訪れる機会があった。従って彼のこのセツルメントを通じて得た信念などを思う存分講演の会衆に話しができた。これは彼をして無上の喜びとなった。また、この機会を通じて大いに大学の改革を呼んでやまなかった。

1979.10.1.

〔註〕

- 1) Beatrice Webb, My Apprenticeship (1946) p. 155.
- 2) Joes Harris, William Beveridge, chap. 3, Toynbee Hall pp. 44-5.
- 3) Toynbee Hall, 19th Annual Report (1902-3), p. 14.
- 4) 山村喬訳, ウェツプ訳, フェビアン主義 (Industrial Democracy, 1920).
- 5) 西内潔, セツルメントの発展過程とその分析(社会事業)「この語を初めて用いたのは英国のカノン・バーネットである。」
- 6) J. Boissevain, Friend of Friends, Oxford (1974).
- 7) Derck Bowskill, People Need People-A Tourney Jhrough the Landscape of Loneliness, 1977.
- 8) B. Sarason, F. Carroll, K. Maton, Human Services and Resource Networks, J. Baso 1977.
- 9) Robert Sinclair, East London, Befert Half Limited 1950. 現在この跡地にキャンノン・バーネット小学校建立。
- 10) W. Picht. Toynbee Hall p. 9~ "Social Idealism"
- 11) 大熊信行, 社会思想家としてのラスキンとモリス, 新潮社, 昭和20 p. 49.
- 12) Hobron J. A, John Ruskin, "Social Reformer."
- 13) 大熊, 同掲書, 193頁。
- 14) Derrick Leon. Ruskin-the Great Victorian. Kegan. pal, 1949. p. 577, 581.
- 15) Barnett, Practicable Socialism. Ibid p. 121.
- 16) By His Wife, Canon Barnett (1921) chap. p. 1.

- 17) W. Francis Aitken, *Thirty Years in the East End*, -A Marvellous Story of Mission Work, 1906. chap. Ⅲ. -C Barnett's Early Day of Bristol and Oxford. p. 23.
- 18) *Diary of Journary of Ireland*.
- 19) *By His Wife*, Canon Barnett, Ibid. p. 7.
- 20) 「St. Marys District Committee」
- 21) Abel, Camon Barnett and His Thirty Year. Ibid, p. 14～
- 22) *His Wife*, Canon Barnett. chap. 7. Wedding day p. 71～80.
- 23) 三好豊太郎, 社会事業講義, 三省堂, p. 581.
- 24) W. Picht, *Toynbee Hall*, Ibid. p. 24.
- 25) “Poor Jew” 1900年にはロンドンにユダヤ人が11万人住んでいた。その内10万人がイーストロンドンに住んでいた。この大部分が「貧しいユダヤ人」達であった。
- 26) W. Picht, Ibid 24. Criminal district.
- 27) C. Booth, *Life and Labour of the People in London*, 1902.
- 28) 横山定雄, 同掲書, 48頁, 植民地コロニー。
- 29) 西内潔, セツルメントの発展過程とその分析『社会事業』131頁, 身を投じて。
- 30) 生江孝之, セツルメントとソーシャル・センターとどう違うか, 社会事業, 14巻3号, p. 3～ 身を投じ貧民との交わり子供とらの生活を共にして救済し, 向上せしめんとする……。
- 31) L. Pacey, *Reading in the Development of Settlement Work*. 住み込み。
- 32) 大林宗嗣, セツルメント研究。
- 33) Young & Ashton, *British Social Work in the 19th Century* 1956 p. 224.
- 34) 西内潔, 前掲書, 133頁「彼は1860年から9年間, 東ロンドンのスラムの牧師としてスラムの研究と改善に着手すると共に多勢の優秀な後継者を養成した。」
- 35) 徳永重雄, セツルメントの変遷とハルハウス, 日本社会福祉大紀要から15集, 1968, p. 107.
- 36) C. Barnett and Mrs Barnett, *Toward Social Reform* (1909) p. 271.
- 37) *Colony of members of the upperclasses*, : W. Picht, *Toynbee Hall*, Ibid p. 1.
- 38) *Autonomous Group With in the Neighbourhood*. : Basil A. Yearles *settlements and their out-look*, p. 126.
- 39) 高島進, バーネットの大学セツルメント思想, 『日福大研究論文集』, 1963, p. 15, 6「新自由主義」
- 40) 阿部志郎, アーノルド・トインビー, (6)キリスト教的に……『社会事業』Vol. 36/2, 3号。
 Toynbee speaks : Workman, we have neglect you. Instead of justice we have offered you charity, and instead of sympathy we have offerd you hard and unreal advice. But I think we are changing. If you would only believe it and trust us, there are many of us who would spend our lives in your services. Anon., Thos. Hancock Nunn.
- 41) B. Webb, *The Origin of the Social Reform*, 1870-1880.
- 42) *Add Earland, Ruskin and His Circle* London 1910. pp. 325～328.
- 43) 阿部志郎, アーノルド・トインビー生誕100年を記念して『社会事業』36巻2, 3号, 昭和28, 85-8頁。